
潜在能力は有効に使いましょう（改）

達ノ音吉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潜在能力は有効に使いましょう（改）

【NZコード】

NZ944Z

【作者名】

達ノ音吉

【あらすじ】

笛木涼（主人公）は平穏な日常に過ごしていた。幼馴染のエル（巨乳）や悪友の燐（負け犬）とともに、平凡なりとも面白おかしく日常を楽しんでいた。ある時、涼たちのクラスに転校生がやってくる。銀髪の少女　　リア（貧乳）と名乗った彼女に対してもラスマイトたちの反応は……土下座だった。神、魔王、死神、ドラゴン……なんでもありの潜在能力を持つ少年が織りなす学園ファンタジックコメディです。

8000PV超えました！

着々と「潜有ファン」が増えてきて、音吉は幸せです！

旧作「潜在能力は有效地に使いましょう」の改稿版です。しばらくしたら、一いち方に全部移すつもりなのでその頃よろしくお願いします。

1 おっぱい談笑

「 もうひ、いい加減にしてくださいー。」

「……黙るのは、あなた」

みなもとせいつ
源莊七号室。

今にも抜けそうな床と、所々かびた畳。
老朽化した六畳一間の造りが何とも言えない侘しさを醸し出して
いる。見た感じを一言で言つならば、「廃れていく」が妥当じゃな
いだろうか。

そんなこの部屋に響き渡る乙女たちの怒声

「 あなたが何を言おうと、涼くんは渡しませんー。」

金色に輝く髪をした少女 ハルは大きく盛り上がる一つの隆起
の前で、手をぐっと握り締めた。まっすぐに据えられた瞳は、「絶
対不譲渡」の意志を秘めている。

ちなみに「隆起」とは おっぱいのことだ。

彼女の豊満なそれは、見る者を魅了し、虜にする。

「涼は私のもの。」これは決定事項

小さな声で呟くのは、幻想的なまでの銀の髪を持つ少女 リア。

彼女は一寸たりとも表情を変えることなく、淡々と答えた。

おっぱいは、小さい。

エルと違つて身体の起伏が乏しく、非常に小さい。

大事なことなので一回言いました。

「 なつ、そ、そんなのするいですっ、断固抗議しますー！」

「するくない……かしこいだけ
い、一緒じゃないですかっ！」

納得がいかないと、頬を膨らませ不満そうに言うヒルと、気にするそぶりもなく、難なくとあしらつコア。

交錯する視線と視線のぶつかり合い。間に火花が散っているかのように両者は互いににらみ合い、一歩も引かない意志を見せ合っていた。

そんな様子を遠田で眺める一人の少年。

何を隠そう……いや、何も隠してないけど、僕こと、さなきらよ 笹木涼のこ
とだ。僕はもうかれこれ一時間以上もこの光景を田の当たりにして
いる。

正直、暇だ。暇すぎて、ひつまぶしが食べたいくらい。

「だ、だいたいどうして魔王側が涼くんを狙うんです？ 涼くんは
神の力を持つ者 手を出す理由なんてどこにもないじゃないですかー！」

「違う……涼は魔王の力を持っている。それは実証済み」

そう言つと、リアは艶めかしく唇をなでる。

「う、嘘です！ 涼くんが魔王だなんて。そ、それに今も神の力を
感じますしー！」

「私だつて魔王の力、感じる。だから涼は私のもの」

「一む、何やら僕の話をしているようだが、何を言つてゐのかさ
っぱりわからない。

神？ 魔王？

ファンタジーな妄想は中一で卒業し はつ！？

「ま、まさか！ 僕は3ちゃんねるの神」

「じ、じゃあ、涼くんは相反する一つの最高位の力の両方を持つているということですか……？」

「そういうことになる

「……」

僕に一瞥の反応すら見せず、一人はおのおのに驚愕を露わにしていた。

「べ、べつにかまつてくれなくて悔しいなんて思ってないんだからねっ！」

……話の内容から察するに、僕には神とか魔王とか、何かしらの力があるらしい。しかも、それはすごいことのようだ。それは二人の驚きよしを見れば一目瞭然だった。

「あつ」

脳裏をよぎったこと、僕は思わず声を上げてしまった。

「どうしたんですか？」 「……何？」

先ほどまで言い争っていた二人は、揃つて僕のほうを訝しげに見てくる。

フツ、それも些細な事さ。

僕は気づいてしまったんだから そう、とても重要なこと。それはこれから将来を左右するかといふほどのことだ。

「ひとつ、聞いてもいいかな？」

仰々しく人差し指を立て、僕は真剣に言った。

「それは就職で有利に
「なりません」「ならない」

即答だった。

どうやら神や魔王は資格ではないらしい。

ふう……世知辛い世の中だよ。

一日のこと

僕こと、笹木涼はいつもどおりに平凡な日常を過ごしていた。いつもどおりに目覚め、いつもどおりに朝の支度をする。

それが僕の当たり前の日常であり、平凡だった。

朝のまどろみを春の暖かな陽気と、小鳥たちの囀りが盛り上げている。

もう、桜が満開になる季節。

春になると変なのが出でてくると母さんから聞かされてきたけど、残念ながら今年はまだお目にかかるつてない。というか今まで一度も見たことがない。

まあ、それを言つてる母さんが一番変人なんだけどね。

僕が実家にいるときは「出たな、魔王！ その命、頂戴する！」

「ははは、神に使わされし勇者よ！ 返り討ちにしてくれるわ！」と、父さんといチャイチャヤしてゐるのを毎日見てたからね。真剣で切りかかつたりとか、甲冑着てたりとかでかなりリアルだったけど。まあ、傍から見てる僕に言わせれば、「いい歳して何してんの、この人たち？」って感じだよね。

つまり何が言いたいかというと、僕は変人がどれくらい変な人のことを指すのかがわからないということ。

幼いころから両親たちの変人ぶりを見ている僕はその手の感覚が麻痺しているらしい。

つい先日も悪友から「お前の幼馴染なんだよ！？」といひこりおかしこや！」と何やら批判されたところなのだ。

ピーン、ポーン……

慎ましいチャイムの音が響く。
おつ、噂をすれば何とやらで、

「涼ぐーん、学校行きますよー」

なじみのある透き通るような声。

玄関のほうから、悪友に言わせるといひのこりこりおかしい幼馴染の声が聞こえてきた。

「あいあい、わかりましたよー」

曖昧な返事を返して、鞄をとり、朝食のパンをかじりながら玄関に向かう。

ドタバタと足音を立て、駆けていくと そこには、金髪の美少女がいた。

眩しい金色の輝きが田に飛び込んでくる。流麗な長い髪と彼女の白無垢のような肌と相まってか、何度も見ている僕でさえ田を奪われてしまつ。

見惚れていると「早くしないと遅刻しますよー」と急かされ、ようやく我に返る。

「ふあふあつふえふ」

わかつてゐる、と言おうとしたが、パンを加えている状態なのでち
ゃんと言えていない。

気にせず、僕は腰を落として靴の紐を結び始めた。

「もうひ、本当にわかつてゐるんですか！」

どうやら解読してくれたらしく。

さすが幼馴染、と思った。

僕がこっちに来ると言つた時も、「わ、私も行きます！」と一緒に進学を決めたらしいだ。

今ではこの源莊の隣にある「ザイナーズマンション」に居を構えて、毎朝僕を迎えてくれている。

本当に氣のきく幼馴染だ。いつそのこと、お母さんって呼びたい。

「いへん。出来た幼馴染を持つて僕はしあわ

田の前の光景に息をのんだ。

パンを飲み込んで、靴ひもを結び終え顔を上げると セーリング
一つの山があつた。

おっぱいだ。

制服を征服せんが」とぐ、双乳が大きく血口主張している。

今、下から見ている僕からすれば、上が見えないほどの大きさだ
つた。

僕は率直に

「いめん、エル。下乳で上が見えない

「！？」

感想を言つてみた。

バツと後ろに飛び退くように僕から離れるエル。その顔は羞恥の

ためか、熟れたトマトのように真っ赤になっていた。

今さらだけど、彼女、エルトリーナ・ラファードは僕の幼馴染だ。
そう、僕らは小さいころからなんでも一緒にいた。

「ははは、恥ずかしがることないよ。一緒にお風呂に入った仲じゃないか」

「つ！ い、今と昔じゃ全然違いますっ！！」

「うん。確かに大きくなつたよね？」

「ど、どこ見て言つてるんですか！？！」

「どうして、そりや、ねえ？」

ひょうひょうとした僕の態度に、エルはすでに涙目だ。両手でその大きな胸を隠し、こちらをキッと睨みつけてくる。

「包み隠さず言つならば おっぱいだよ？」

「ホントに堂々としてますっ。もうっ、少しばかり恥びれてくださいーーー！」

「うーむ、なら専門用語を使えば 乳だよーーー！」

「言い方の問題じゃありません！」

「流行の言葉を用いるならば パイ乙」

「それ、失礼ですよね？ 私、怒つてもいいですかーーー？」

「……早いかないと学校遅刻するよ？」

「ええっ、涼くんがそれを言いますかーーー？」

エルの叫びを切り口に、いつして僕の朝のおっぱい談笑は幕を閉じるのだった。

2 M学級崩壊

私立 神魔高校。

源莊より徒歩十分の場所にあるその学校こそ、僕やエルの通う高校だ。伝統にあるものの 偏差値、中くらい。部活動成績、そこそこ。といったどこにでもありそうな校風だ。

特徴は、特徴がないのが特徴。そのせいが、昨今の少子化のせいかはわからないが、僕が受験する時も定員割れだったようだ。都市部に近いにもかかわらずである。

目立つものといえば、校門近くにある石碑。そこに刻まれている「変人こそ、天才だ」の言葉は、初代校長の口癖だったそうだ。たぶん、校長が変人だったんだと思う。

ともあれ、僕がこの学校に通おうと決めたきっかけがそれだったのだ。

なぜ実家から遠いこの学校に進学しようと考えたのかと聞かれれば、思い当たる節は一つしかない。

僕は思った。

こんな面白いことを石碑に刻む校長が建てた学校がつまらないはずがない、と。

僕の成績ならばもう少しレベルの高い学校に進学することもできただけど……

やつぱり、一度しか青春。

謳歌するには、面白い学校に行かないとね？

ちなみにこのことをエルに伝えたら「そ、そんなことのために私は……！」と何やら手と膝についてうなだれていた。

うーむ、何があつたんだろうか？

教室に入ると、雰囲気に違和感を覚えた。

何というか、男女問わず騒がしい。皆それが目を輝かせ活気

に満ち溢れている。女三人集まれば、姦しいというが
るとやかましいな。男が加わ

「ねえ、これどうしたの?」

僕は近くにいた悪友に声をかけた。

「おお、我が友、涼よ!」

「ごめん。僕、友達とは……」

「思つてなくともそこは友達で通してくれよー。申し訳なさそうな
態度が逆につらこよ!」

悪友は悲痛そうに叫んだ。

ガラの悪そうな癖のある茶髪に、ピアス。ファッショソ雑誌を真
似しましたと言わんばかりのチャーリー容姿に比べて、心がピュアな
この男。

名を、紅蓮燐。
くれんりん

名前負けとは、まさにこの男のことだわ。

そつ、この男を一言であらわすなら、負け犬。

「……なあ、涼。ものすごく失礼なこと考えてないか?」

「うん」

「ちょっとは悪びれてくれよ!」

「だつて負け犬は事実だし。否定できないよ」

「そ、そんなことねえよー。お、お前らも何づなづいてんだ!」

「!」

教室を見渡すと、ほぼクラスメイトの全員がうつぶつとつづい
ていた。

やつぱりみんなもそう思つよね。だつて、燐だもん。

「 で？ 次は誰にフられたの」

「 ま、まだフられてねえよー。」

「 まだつて……」

燐は学内にいる女子全員に告白して、全員に断られたといつ記録を持つ男だ。

ゆえにその実績をたたえ、負け犬と呼ばれている。偉大なる敬称だ。

今では他学区の女子にまで手を出さうとしている。まあ、結果は見えているけど。

僕は心底不憫そうな顔で燐を見つめた。

「 も、そんな顔で見るなよ。心が折れそうになるだろー。？」

「 まあ、燐のことなんてどうでもいいけどね」

「 ど、どいつもことか言つた。こつちは死活問題なんだよー。」

「 朝からテンション高いね。高血圧には気をつけたほうがいいよー。」

「 誰のせいだよー。」

「 まあまあ、落ち着きなよ。ストレスをためるとハゲるよー。」

「 お、お前が言つなあああああー。」

ふう。せっかく朝からすでに息絶え絶えの燐に氣を使つてやつたのだが。

それにしても本当に不憫なやつだ……

「 はあ、相変わらずですね。それでビリしてみんな騒いでいるんですけど？」

「 のままいつても踏ん切りがつかないと思ったのか、僕の隣に控えていたエルが自ら問うた。

それが救いの女神に見えたのか、燐は

「おお、助かった！ さすが、ラファエ　」

何かを言おうとした。

だが、刹那のうちに燐は窓の外にいた。

遅れて聞こえるガラスの破碎音。

窓ガラスには人の形をした跡があり、エルはまるで何かを押した
ような体勢のまま固まっていた。

僕には何が何だかわけがわからなかつた。

混乱する頭の中　だけ、一つだけ理解していることがある。

「……、三階だよね？」

呟いた時、窓の外にあつた燐の姿は消えていた。

「……………」

姿の消えた燐の声が断末魔に聞こえたのは、気のせいだと思った
い。空耳だよ、空耳。

あ、そういうえば騒ぎの理由聞いてないな。

「いつたい何だつたんだろうね？　　エル」

「え、あ、その そ、そつ、幻覚ですよ、幻覚！」

「？ 僕はいつたい何の「騒ぎ」だつたんだろうね、つて聞いたん
だけど……？」

「あつ、や、そうですね！ な、何の騒ぎだつたんじょうね！？」

「？？」

どこか慌てるよつな様子でエルは相槌を打つた。
「一ん、何か変なこと言つたかなあ……」

結局、燐が帰ってきたのは毎休みだった。

全身にぐるぐると包帯を巻きつけ、ようやくとこすりに近づいてくる。ぱっと見で言ひうと、エジプト産のミイラにしか見えない。

「ええと、大丈夫？ ものすごく瀕死の重傷っぽいんだけど」

「あ、ああ。た、大したことねえよ」

声をどもらせながらも、燐は問い合わせに答えてくれる。

だけど、その視線は僕ではなく エルのほうをチラチラとうかがっている。よく見ると、燐の身体はブルブルと小刻みに震え、その目はまるで猛獸に怯える小動物のように恐怖に染まっている。そんな縮こまっている燐に、エルはにこりと微笑み、

「次は、ありませんよ？」

一言。

その言葉の意味を僕は理解できなかつたが、対照的に燐は顔を青くさせ何度も、何度もうなづいていた。

次は、つて何のことだろ？

「それで？ 結局、朝はどうして騒いでたの？」

なし崩しに聞くことができなかつた朝の「騒ぎの理由」を、僕は問うた。

「ああ、転校生が来るんだよ……」

「えつ、転校生？」

「ああ、そうだ」とこつが、今の今まで誰にも聞かなかつたのか、もつと休みだぞ？」

「うん。死んだ燐がうかばないと思つて……」

「し、死んでねえよ！ 生きてるよー。」

「ちつ、しぶとい」

「お前、ホント鬼だな！」

「で、転校生の話は？」

「……」

疲れた顔をして燐は觀念したようにがつくりと肩を落とした。
まつたく、世話の焼けるやつだよ。

「……って、まだ来てないのか？ 今日、転校していくつて話だつたんだけど」

「そういうえば来てないね？」

「ええ、来てませんね」

僕のふりにエルは首を縦にうなづく。

同時に大きなおっぱいが揺れたのは、内緒だ。

「おかしいな……魔族の事前通告じゅや、今田のはずなんだが
「マゾク？」

突然出てきたワードに僕は思わず首をかしげた。

マゾク って、何？

そんな僕の反応に、燐は右往左往と慌てている。

「な、何でもねえよ！ 某学者の大予言ぐらに何でもねえよー！
「そ、そうですつ。ハヤシライスの「ハヤシ」の意味ぐらい何でも
ないです！」

……なぜか、エルまで一緒になつて慌てていた。

二人の息の合った慌て方から察するに……僕にだけ隠すつもりだな?

そうとわかれれば意地でもやつてやるー

うーむ、マゾク、まぞく、マゾ……はつ!?

「大丈夫だよ、一人とも」

菩薩のごとく澄んだ優しい目で僕は一人を見た。
わかつてしまつた……そう、わかつてしまつたから。

「世の中、確かにそういうことに偏見を持つ人は多い。けど、中にはりだと言う人はいっぱいいるから……」

二人は「あれ」な人たちだつたんだ
そんなことも知らず、僕は今まで……

心に込み上げてくる自らの悔しさを戒めるように、僕は言った。

「鞭で打とうか?
『マジやねえよ!』

恥ずかしいのか二人は声をそろえて否定した。
わかつてるよ、僕は偏見なんか持たないから。君たちは
だよね?

M族^{マゾク}

昼休み、生温かく見つめる僕の視線が途切れることはなかつた。

『…………』
『…………』
『…………』

3 銀色の痴女

その日、噂の転校生が姿を見せることはなかつた。

待つていても「来ない」と伝わつた事実に、良くも悪くも盛り上がりをみせていたクラスメイトたちは皆そろつて肩を落とし、残念そうにため息をついていたりする。それだけ転校生が来るのを樂しみにしていたのだ。その気持ちは痛いほどわかる……お預けにされたものほど欲しくなるというものだ。氣分が沈むのも、憤るのも仕方のないことだと思つ。

でもまあ、皆も落ち着きたまえよ。

僕が考えるに、登校する学校を間違えたのだ。うん、間違いないね。

そう、転校生さんはおっちょこちょいなのだ。
仕方ないよ、うんうんあるある。

ちなみにそれをエルや燐に話してみると「そんなこと実際にやるのは、涼くんだけです!」「ありえねえよ! どんな推理だよ!」と驚愕していた。

失礼な。僕は一回だけだよ?

放課後の下校時。

青春の汗を流すという名目の部活動や、より良い学校生活を提供するという名目の委員会に縁のない僕は、授業が終わるといつものよつにエルと一緒に帰路についていた。朝の登校の時と同様 僕は源莊に帰り、エルは隣のマンションへと帰るために、それぞれの道は同じなのだ。

でも、なんというか 幼馴染と一緒に下校するのは、妙に役得感があるよね?

そんな他愛もないことを想いながら、僕はエルに話しかけた。

「ねえ、M」

「まだ引っ張るんですかっ、それ！？」

僕の呼びかけにエルは大げさなまでの反応する。その顔は驚きでいっぱいだ。

ちゃんと返事を返してくれないと……やれやれ、反抗期かね。

「ねえ、エル。聞いてもいいかな」

「ふ、普通に流されました！」

エルの顔は驚きが一倍速だ。すごい。

僕は気にせず続ける。

「今日は来なかつたけど 転校生さん、明日は来るのかなあ？」

「……気になるんですか？」

何気なく僕が問うと、なぜか急にエルはムスッとした顔になつた。口をとがらせるその様子は、何だか拗ねているように見える。？ 転校生さんのことを見いただけなんだけどなあ……

「いつたいどんな人が来るんだろうね？」

「そうですね……どんな人でしょうね……まともな人がいいですよね……」

なぜか遠い目をして呟くエル。

えー、そつかなあ。僕としては面白いほうがいいと思つんだけどな。

「僕個人としては、宇宙人か、未来人か、超能

」

「それは絶対に言わせません！！」

「男の子かな？ 女の子かな？ それとも、両方の人かな？」

「最後のは個人的に聞かなかつたことにしたいです……」

声細々とげんなりとしていくエル。田代の苦勞がたたつているのか、かなりお疲れのご様子だ。

だけど、もう一つだけ聞いてほしい。

僕にはまだ気になることがあるのだ。

「これはエルにとつても重要なことだけ 転校生は、Sかな？」

それとも、Mかな？」

「ぜんぜん重要じゃないですね！？」といつか、それはもう忘れてください！」

「でも、Mの人だつたらエルも、燐も仲良くできそうだね？」

「いやですよつ、そんな人とは仲良くできません！」

「あ、そうか。エルたちからすれば、Sのほうがいいよね。ごめん

……」

「ちょ、何かこの謝罪は決然としませんよ！？」

エルと別れ、僕は自らの住居である源荘に帰つてきた。みなもとじやう

築六十年の一階建てアパートである、源荘。

このアパートの主な特徴を言えば、とにかくボロい。本当に人が住んでいるのかと思つほど廃れている。柱は軋むし、瓦は今にも外れそうである。

例えて言うなら、紅蓮燐だ。くれんりん

やつのように全ての女性から見放されないとしか言いようのな

い存在。そしてこの源莊は、誰しもが毛嫌いするアパート。つまり源莊と燐は似ているのだ。そつくりだと思う。特に誰も寄り付かない外観とか。

だけど苦学生である僕にしてみれば、月の家賃一円の「」のアパートは最良物件だったのだ。

最初に家賃の話を聞いた時は耳を疑ったけど、こざれに来てみると納得がいった。

ああ、確かに一万だな、と。

苦学生といったけど、別に両親からの仕送りが少ないわけではない。

月五万、といえば高校生の一人暮らしにしたらもうこぼうだらう。十分やりくりできるし、できている。だけど姫さん、よく考えてほしい。

ゲームとか、漫画とかほしいよね？

だから生活費はできるだけ削らないと、ね？

ゆえに僕はこの源莊に住んでいる。そう、華麗なる高校生活を送るために…

アパートの端に沿って一階へと続く階段を登り、僕の「」室がある

「七号室」に向かう。

六畳一間のその部屋こそ、僕の家だ。

よつやく一階にたどり着き、突き当つの部屋のドアを開けると

「…………」「…………」

そこには……下着姿の女の子がいた。

身に付けているものといえば、ブラとパンツのみ。スカートを手

「してこないといふを見ると、どうやら着替え中の『』様子だった。

「間違えました」

そう言つて僕はすべてドアを閉めた。

「ふう、危ない危ない。三秒ルールでギリギリセーフだね」

今は二回ノンマ五秒くらいだったな、と安堵の息をもらす。

一步下がつて部屋の番号を見ると、「六号室」と書いてある。僕の部屋じゃない。

どうやつ、間違えたようだ。まあ、よくあることだよ。

僕の部屋はその隣 突き当つの一戸、四十畳。

ドアが開く。

「こやあ、ひやつとしたよ……まさか、女の子が着替えてるなんて。ここがテキサスなら、僕はハチの巣だろ?」

「待つて」

「OH! イカズゼッ、ジョージィ。ナイズジョークだ! HAH AHA」

「あなたは、笠木涼?」

「…………はい、そうです。ごめんなさいもつしません許してくださいねー」

開いたのは、僕の部屋ではなく、六号室のドアだった。そこから覗き見るようにひょっこりと少女が顔を出している。

……誤魔化しきれなかつた。

くわう、どうしてばれたんだー ちゃんと三秒測つてたのにー

「そう。あなたが笠木涼……」

確かめるように僕の名を呼んだのは、銀色の髪をした少女だった。何を隠そう、先ほどの下着姿の少女である。

エルの金髪と対になるような、肩にかかるくらいの短い銀髪。光の透き通るようなその色は、どこか幻想的で美しい。そしてそれを際立たせるが」とく、少女はさらに美麗だった。

ただし、その顔には「感情の波」といったものがまつたくと言つていいほどはない。無表情という言葉は彼女のためにあるような気がした。

「今日隣に越してきた、リア。よろしく 涼」

まとめたように淡々と呟くと、リアと名乗った少女はドアを閉め、そそくさと浴室へ戻つていった。

……

「…………え？」

彼女がドアを閉めてから、たっぷりと僕はその場で固まっていた。予想してた事態は当然、着替えのことで怒られるのかと思つていたのだが、本田からの隣人は何事もなかつたかのように場を去つてしまつたのだ。

この場に取り残された僕にはもう何が何だか、わけがわからなかつた。

だつて下着姿を見られて何も言わないなんて、まるで……は

つ！？

「どうか、彼女は……痴女だつたのか」

僕は……またも気づいてしまつた。

彼女、リアは見られると、興奮する人だつたんだ。

今度、エルや燐に「変態仲間」として紹介してあげようと思った。

4 不可思議な神魔

何だかんだの葛藤と、幾人かの不幸と苦労を経て　今日もまた陽は昇る。

「転校生、あつ、学校間違えた事件」から田を躊躇ぎ、翌朝。昨日と同じく、HILとともに登校すると　またしても、不自然なほどの喧騒に教室全体が包まれていた。主だつて特に今回は、男子がうるさくほどに騒いでいる。むむ苦しご」と、この上ない。

「ねえ、これどうしたの？」

真相を問いただすべく、僕は近くにいた悪友に話しかけた。

「おお、我が友、涼よ…」

「『めん。僕、友達とは……』」

「わかつてたけどさ？　絶対そう言われるのわかつてたけどさー…？」

一度目にしてようやく伝わった眞実に、悪友は悲痛そうに叫んだ。友達に分類されない悪友こと、紅蓮^{まけいね}燎は今日も今日とて、朝からテンションが高い。

「おい、涼。今、俺のこと負け犬とか考えなかつたか？」

「うん」

「正直すざわぬつ。といふか、ホント少しば悪びれりよー…」

いつも通りといふる燎との他愛もないやりとりの中に、僕は既視感を思つた。

この会話、昨日もしたよつな……

「昨日、昨日……あ、そうだ。燐に紹介したい痴女がいるんだけど」

「何で痴女紹介すんだよ！そこは普通、友達とかだろ！？」

「友達って……僕の知り合いでM^{マツ}の人は、エルぐらいしかいないんだけど」

『だから、M^{マツ}じゃねえよ！』

僕の隣でおなじみの相棒 エルとともに、燐は疑いを晴らすべく必死に叫んだ。

しかし、いくら否定しようとも 事実は事実。僕のハートはそう簡単に心変りはできないよ。

「はあ……それで？ 今日はまだじつじて嘘さん騒いでいるんですか？」

僕の生温かい視線に気づいたのか、はたまたこのままでは話が進まないと思ったのか、しぶしぶとエルは問う。

「おお、デジヤヴだ。ホントに既視感だよ！」

最後に燐が神風に吹き飛ばされたら……！

「ああ、それは今日こそ転校生が来るからだよ。昨日は不確定情報だつたけど、今日ははちゃんとした筋からだからな」

「へえ、そうなんですか。確かに昨日は「待ちぼうけ」でしたしね」

「……」

「おかしい、まったくもっておかしい。

燐が提示した真相に、エルは納得したように相槌を打っている。

そして当然のように、その「巨」なおっぱいがブルンッと揺れた。

「それはいい。確かに良い いや、百歩譲ってすぐいい」という。

う。

だけど、僕はすぐ納得がいかないのだ。

「おかしいよ！ どうして燐が三階から飛んでいかないのさー…？」

「いや、お前がおかしいよ！ 何で俺が飛ぶんだよ…？」

僕の崇高なる目的 テジヤヴは、ＫＹ（空氣読めない）な燐の手によつて無残に碎け散つてしまつた。後もつ少しだつたのに！ 胸の内に残る悔しさを視線に乗せるように、僕は燐を睨みつける。

「何で睨まれてんのか、まったく理解できねえ！」

「はあ……しょうがないね。ホント、燐にはガツカリだよ」

諦め半分に僕は深くため息をつく。あーあ、期待してたのに。ホント、やれやれだよ。

そんな不貞腐れる僕の様子を燐は遠い目で見つめている。

「なあ、エルさんよ。この天然、どうにかしてくれんかね……？」「すいません、私の力ではどうすることも……」

出来の悪い我が子を見る親の目をしながら、二人は細々と呴いている。僕がそちらを向くと、一人はぱつが悪そうに目をそらしていった。

「エルもなんか……やれやれ、一人ともわかつてないね。

このままではまた話が進まなくなるので、大人な僕は話を続けることにした。

「それでさあ、どうして今日は男子のほうが騒がしいの？ 昨日は

同じくらいだったよね」

「転校生が女子だからだよ。男からしたら女子のほうが断然嬉しいからな」

「へえ、だから男子はあんなに嬉しそうに騒いでいるんだ？」

「ああ」

「当然だろ？」と言わんばかりに燐は仰々しくうなづいた。
なるほど、なるほど。確かに女子のほうが、男子的にはポイント
が高いよね。主に目の保養にもなるし。

「転校生は女子かあ　エルはどう思つ？　やつぱり女子より、男
子のほうがよかつた？」

「…………どうも思いません」

感想を問うと、エルは急に不機嫌そうに咳き、頬を膨らませ不貞
腐れている。拳句、最後はブイッと横を向いてしまった。

？　僕、何か気に障ること言つたかなあ？

不自然な態度に思わず首をかしげていると　教室の引き戸がガ
ラガラと開く。

「席につけー、チャイム鳴つてるぞー」

お決まりの文句とともに担任の先生が教室に入ってきた。
時間を見てみると確かに予鈴の時刻を回っていた。どうやら話し
込んでいたせいでチャイムに気づかなかつたらしい。
それは他のクラスメイトたちも同じようで、皆、慌てて自分の席
に戻っている。

「えー、HRを始める前に皆に転校生を紹介する。あー、喧しい、
静かにしろー」

迫力のない先生の注意の声も耳に入らないようで、教室全体はス
タートラインを切つたように騒ぎ始めた。

そりゃ、やうなると思つ。

昨日は昨日で待ちぼつかをへうつてゐるし、今日はそれだけ期待も膨らむといふものだろつ。

特に女子はともかく、男子。

僕の見間違いかもしれないけど、心なしかその目が血走つてゐるやうに見える。転校生が女子だとわかっているせいなのか、やたらとテンションが高い。マウント富士ぐらいに高い。

ちらりとエルのほうへ目をやると、まだ、ぶすっと不機嫌そうな顔をしている。『機嫌斜めのよつだが……本当にどうしたんだろうか？

「あー、ま、いいか。とりあえず転校生、入れー」

諫めるのがめんどくさいになつた先生の声と同時に、教室の戸が開いた。

級友たちが息をのむ中で、悠々と歩を進め、転校生は入ってきた。

銀色の髪をした女の子。

風のよつて颯爽と登場した彼女は僕らのまつへ身体を向き直した。

「 リア、よひしく」

少しの緊張の色も顔に出さず、超簡易的なほじこみ紹介を済ませた。

啞然とするクラスメイトたちと、撫然とする転校生。だが、彼女のその碧眼は視線を外すことなく、ひたすらに僕に向かつて据えられていた。

あれ、リア？ リアって、どこがで聞いたよつな……

「涼、昨日ぶり」

「ひらに小さく手を振り、彼女は僕の名を呼んだ。あつ！」

「君は……昨日の痴女！」

「……リア」

「そうそう、確かにそんな名前だった！ ほら、燐！ 彼女が君に紹介したかった痴女だよ！」

若干興奮気味に僕は、依然として口をポカンとさせて固まっている燐に声をかけた。燐の席は僕の左隣なので、非常に声をかけやすい。

何度かの呼びかけでようやくハッとした燐は

「ベリア」

「！」

何かを言おうとした。

だが、刹那のうちに燐の姿は窓の外にあった。遅れて聞こえてくるガラスの破碎音。そして、なぜか目の前には先ほどまで教壇にいたはずのリアがいた。

窓には人の形をした跡があり、リアは何かを突き飛ばしたような体勢だった。

突然起こった事態に、僕には何が何だかわけがわからなかつた。混乱する頭の中 だけど、一つだけ理解していることがある。

「デジヤヴ完成だね」

とうとうというか、待ちに待つことを喰いた時、窓の外にあつた燐の姿は消えていた。

「ぎやああああああああああああ

教室の窓越しに響いてきた燐の絶叫は、今度こそ断末魔だらうと僕は思った。

本当によくやったよ、燐。君の死は無駄にはしない。あらためて言おう、GOOD LUCK、と。

ここからでは見えない燐の落ちたほうに向かつて満足そうにこうづいて、僕は教室のほうへ身を翻した。

「…………」

田に飛び込んできた光景、それは半数近くのクラスメイトが土下座しているものだつた。

彼らは手と膝をつき、必死そうに地面に頭をすりつけている。頭の下さらされているほうを見ると、転校生ことリアの姿がある。

「えつと……何の宗教？」

困惑する僕は誰にでもなく呟いた。「クラスメイトが土下座する」とこゝの光景はそれほどまでにありえなかつたのだ。何これ、イタイ。

「おすわり」

その虚言に答えたのは、リアだつた。彼女は相変わらずの眉一つ動かない無表情。

おすわり、その言葉を聞いて、僕はある一つの考へに至つた。連想するのは、犬。しかしかわいいワンちゃんなどではない。おすわり、その意味するところは、一つしかない。

「なるほど……僕のクラスメイトたちはM^{マン}だったのか。エルや燐だ

けじやないとは…… M度高いな、このクラス
『Mじゃねえよー。』

僕の導き出した結論に、級友たちは全力で否定してきた。

「大丈夫、皆でやれば怖くないよ」

『お前のその発言が怖いわっ！』

僕の提示した立案に、全身全霊でクラスメイトたちが叫んだ。はつきり言って僕には、それがとても言い訳がましく見えた。若いって、怖い。

津軽海峡冬景色、瀬戸内海鳴門大潮。言いたいことはたくさんあるけど 結論を言えば、僕は暇になった。

三時限目の終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に女王様 もとい、転校生リアの周りには積みあがるように入垣ができていた。彼女が転校生であることを考慮しても有り余るくらいの人たちが彼女の周りを覆っている。そこへ朝の一件で明らかになったMクラスマイトたちも混じつて囲んでいるのだから、取り巻きはものすごく大きい。

ここまでいくとあれだね。取り巻きじゃなくて、エリマキ 天井裏代表のトカゲさんから進呈ものだよ。

まあ、そのせいもあってか、彼女の左隣である僕の席は見事なまでに埋まっているのだ。国土交通省もびっくりである。

ともかく、このままじゃお昼が食べられない。

基本、僕はお弁当派ではないので、購買でパンとか買えばいいん

だけど……いかんせん、問題はそこではないのだ。

いつも一緒に昼食をとるエルのところにいこうとも、彼女は相変わらずご機嫌斜めなままだし。こんな時しか必要にならない燐は朝のあれつきり帰つてこない。

つまるところ、誰もかまつてくれないので僕は暇になつた　といつわけだ。

この状況をかっこよくいうならば　僕は暇を持て余している。
かつて悪くいうならば　僕は本当に友達が少ない。

「はあ……仕方ない。ウロちゃんのところにでも行くかな」

かみのま
神魔高校現校舎に隣接するように場所を陣取る　旧校舎。

べつに「旧」っていうほど廃れているわけでも、昨今流行りのアスベストでも、耐震偽装があるわけでもない。むしろまだ新しいし、現在の校舎と比べてもさして遜色はないよう見える。

これに「旧」をつけるなら、源莊には「古」をつけなければならないと思うほどだ。

だが、旧校舎には現校舎にない特徴というものがある。

それは屋根や壁といった外装に際立っている。外壁に描かれた星みたいな形の落書きや、建物全体を覆い尽くしているおびただしい無数の御札が圧倒的なまでの存在感を示している。

ヤンキーのトンネルスプレー落書きの比ではない。ヤンキーさんたちもここまでは頑張らないし、暇ではないと思つ。

その他にもいろいろな理由はあるが、すでにこれだけでこの旧校舎は言い知れぬ不気味さを醸し出しているのだ。

先日、エルや燐を誘おうと声をかけた時も

「絶対にいきません！　だつてあそこ『はまぐり』……何でもあります。とにかく絶対に近寄らないでください！」と強く注意される始末。

「馬鹿いつてんじやねえよつ。それに旧校舎は封い……何でもねえ。お前絶対に行くなよ、絶対だぞ！？」と何だか、行け！　と言われてこるような気がしないでもない燐の談。

しかし、どちらも必死そうな顔ではあった。

前から思つていたことだが　どうも一人はビビつせんらしい。大木さんほどではないが。

ともかく旧校舎は　誰も近寄らない場所なのだそうです。

校舎の中に入り、鼻歌交じりに廊下を闊歩する。かっぽ

扉を開けた時に「パキイイイイ」と何かが割れるような音がしたのだが、僕は気にせず歩を進めてこいる。だつて壊れたものを気にしても仕方ないし。

建物の造り的には現在の校舎と変わらないので、非常に便利でいて、楽である。

灯りがついてないので少し薄暗いのだが　勝手知つたる人の家。何度も足を運んでいる僕にしてみれば迷つたりすることもないのだ。

「　確か、ここだよね？」

数えて五分も歩いてはいないが、僕は歩を止めた。

目の前には埃まみれではあるが、「校長室」と書かれたプレートのかかった部屋がある。他の教室などと比べても、あからさまにこだけ偉そうな空気が漂っている。

この不景気の波を無視した部屋の前で、僕は「彼女」を呼んだ。

「ウーローリチャーン！　あーセーーー！」

「やかましいわ。といふか、その呼び名がよのじやー。」

といふえず待つてこると、一秒もしないうちに勢いよくドアが開いた。

校長室の中から出てきたのは、一人の少女。

奪つぬつに目を惹く炎色の髪は威厳の漂う華麗さを誇張し、髪よりさらに深い赤色の瞳は彼女の美しさをさらに際立たせている。確かにそれだけ見ると、圧倒されそうな感じなのだが。

「やあ、ウロリチャーン。三日ぶりだね。どう、元気にしてた？」「やうこひお主は相も変わらずといった感じじゃの？……」

室内に入つて僕が軽く挨拶をすると、疲れたような顔をしてがつがつと肩を落とすウロリチャーン。

「へん、挨拶が聞こえなかつたのかな？」

「本日はまめ口柄もよべ　ウロリチャーンも相変わらず口コロッつな体型だね？」

「失礼なやつじやな！　といふか、前置き意味ないな！」

「拝啓、ウロリチャーン　今日も素晴らしい幼女属性だね？」

「お、お主本氣で容赦ないな！」

訴える幼女　ウロリチャーンはびくつしたよつてんだ。

しかし、彼女の体型はとにかく小さい。身長があまり高くない僕と並んでも、頭の高さが肩ぐらいまではつかりと言つてしまえば、幼児体型。局所的な流行である、「萌え」の対象だ。

「ええい、いい加減にせい。とにかく…　妾の名は　」

「確か、ウールポロシャツだよね？」

「ぜんぜん違つわー ウロボロスじゃ、ウロボロスーー 誰がポロシャツじゃー」

「惜しい」

「惜しくないわああああああー」

やうかなあ、僕は惜しいと思つただけだな。だってウロボロスと、
ウールポロシャツ あ、夏によく着るよな、ポロシャツ。
今前を聞違えられたことに嘆くウロちゃんは、目を細めて睨んで
くる。

「まつたぐ、何故じや？ 何故、お主のよつが『魔王』の能
力を持つておるのじや……」

「え、今日はドロクHするの？」

聞き覚えのある単語に反応して僕が問うと、ウロちゃんは「はあ
ああ」と大きなため息をついた。

え、だって「リュウオウ」でしょ？ あいつは配合とか大変だよ
ね。

ドロクHについて考えていると、ウロちゃんは漠々といった様子
で話しかけてきた。

「……それで今日はどうしたのじや？ お主はこつもこんな時間に
は来んじやううが」

ウロちゃんが言つとおり、普段はこんな時間にここを訪れたりは
しない。遊びに来るのは大抵、放課後の 学校が終わつてからだ。

「ああ、うん。実はひ、僕のクラスに女Hね……うつぽい転校生が
来てて、教室が騒がしくつてさあ」

「ほほう、転校生とな？」

ウロちゃんは興味ありげに田を細めてくる。さすが、ギャルゲーマスター！ウロちゃんだ、『転校生』への反応がすごい。

どうやらウロちゃんも知りたそのうえで、僕は続けた。

「髪の銀髪で、何といっても美少女で……」

「ほ、ほ。定番じゅのう」

「そして極めつけは 飲乳」

「お主、本気でひどいな！ デリカシーとか知らんのか！？」

普通に転校生のことを話しただけなのだが、ウロちゃんは田を見開くほどに驚いていた。

えー、僕としては褒め言葉のつもりなんだけど？

「で、まあその女の子がまたすこべつた。おそれわりと称して、クラスメイトの半数くらいを土下座させたんだよ」
「何、土下座じゅうじ……？ それは皆を屈伏させていたといつ！」
「かの？」

「うん、まあ。皆、必死そうに頑すじつけてたし」

あごに手を当て説しむウロちゃんの間に、僕は首を縊て相槌を打った。

そんな僕を見てか、ウロちゃんはさらに惊讶そうな顔をした。

「……まさか、かのう」

「え、どうかしたの？ 体調とか悪いとか

「あ、ああいや、何でもないのじや。気にするでない

「それならいいけど。まあ僕の見解を言えば、クラスメイトたちは

Mだね、間違いないよ

「いやなクラスじやな！」

険しい雰囲気が吹き飛んだ。

その後も旧校長室でお皿を取りながら、ウロちゃんといろいろ会話をした。

プレイしたゲームはもちろん、ドロクH。だが時間が足りず、結局、リュウオウは作れなかつた……

再び転校生の話題が出たときに、「ウロちゃんはまた眉間にしわを寄せ、険しい顔になつていていたのが気になつたけど……」「ねえ、ウロちゃんって、何歳なの?」「ふんつ、一千は軽く超えておるわ」「ふうん、年季の入つた合法口りなんだね」「お主、すごいな!」などとやつとりを交わしているうちにいつの間にか消えていたので

幼女チョロイな、と思つた。

「ビニへ行つてたんですか、涼くん?」

ウロちゃんのところから教室に戻つた僕を待ち構えていたのはエルだつた。

さつきまで不機嫌そつだつたのに今は向いづから話しかけてくる。

「ウロちゃんのところだけ?」

「ウロちゃん……? 誰ですか、その人」

やつぱりといふか、ご機嫌斜めは継続中のよつだ。

でもあんずることなかれ。僕はエルが不貞腐れている理由に察し

が付いているのだ！

「エル、気づいてあげられなくて……」めん

「なつ、急にどうしたんですか？」

真剣に頭を下げる僕に、エルは狼狽している。

だから無理はしなくていいんだよ。僕は……わかっているから。

「今日は……女の子の日だったんでしょう？」

「ち、違いますよ！」

「ま、まさかっ、妊娠！」

「ぜ、ぜんぜん違いますっ！…！」

火がついたように顔を真っ赤にしてエルは全力で否定してきた。
あれ、違ったの？

「じゃあ、どうして機嫌が悪いのぞ。説明してくれないとわからな
いよ？」

「そ、それは……その……」

さらに顔の火を炎上させ俯くエル。

どうしたのかとエルの顔を覗きこむつとすると　不意に後ろから声がかかった。

「涼」

声の主は、リアだった。

「どうしたの？　おっぱいが大きくなるコジをエルに聞きに来たと
か？」

「……………違ひ」

やけにその沈黙が長かった。そんなに気にしてゐるのか。
貧乳は貧乳で需要があるのに……もつたいないなあ。
リアは一度エルのほうを見てから、僕に言った。

「話が、あるの」

「……じや、駄目なのかな？」

「…………」

反復させた僕の問いに口を開かずリア。
だんまりを決め込んでいたところには、口で言えないこと、
つてことか。

「うん、わかつたよ。じゃあ、今日僕の部屋に来てよ。隣だしね」「わかつた。それでいい」「ちょ、ちょっと待ってください！」

先ほどまで意氣消沈していたエルは、必死そうな形相に変わつて話に割り込んだ。

「と、隣つて、どうこうことですか！？」

「ああ、そういうえばエルにはまだ言つてなかつたけど、リアは源荘の六号室に住んでいるんだよ」

「ええっ、涼くんと同じアパートにですか！？」

驚愕を露わにしたエルは、勢いよくリアのほうを向いた。

そして その激しい動きにBIGメロンサイズのおっぱいが左
右に揺さぶられる！

「うん、ナイスおっぱい！」

「もうっ、意味がわかりません！」

天に届くだろうか若き乙女の叫び声を最後に、タイミングよく予
鈴が鳴り　昼休みは終わったのだった。

5 タイムセールと関西人

ドロード・カツ、と田を見開き　僕は高らかに宣言した！

「魔法カード発動っ、「右手にエルを左手にリアを」……このカードの効果により　クラスメイトはM奴隸と化す…」

『ちょ、チート過ぎるうえに理不尽だろ！』

「し、しまった！　僕としたことが……クラスメイトたちはもともとM^{マジ}だったの忘れてた。くそう、ケアレスミスとは……」

『その解釈は納得いかねえよ！？』

「うーむ、やたらと級友たちからの批判が多いな。

やつぱり、原作クラッシュに怒りを浸透させているのだろうが、僕はクラスメイトたちの反応に思わず後ずさってしまう。
どうでもいいけど、マニア多いな、このクラス……
だがしかし、本当の問題は一向に解決していない。

「じゃあ、どうしたらそこ通してくれるのさ？」

教室の出入口である二つの前から動こうとしたしないクラスメイトたちの様子に、僕は口をとがらせる。

現在、放課後の下校時刻を回ったところ。

窓越しに眼下の校庭を見ると、すでに帰路へとつき始めている生徒もちらほらと見え始めている。

当然のごとく、僕も学校から帰るために、教室を出ようとしたのだがなぜかクラスメイトたちがカバディの体勢で止めてきたのだ。思わぬところでの挑戦だったが、僕も負けじと　カバディ、カバディ、カバディ。

「おい……何やつてるんだよ、涼」

「当然、カバーディだけど？」

「だから何でだよー!?」

いやだなあ、勝負を持ちかけてきたのはそっちからじゃないか。スポーツマンシップを否定的な相手の態度に僕は首をかしげる。えつ、カバーディじゃないの？

「いや、カバーディとかそういうことじやなくてな？ お前はどうして、リアさまと一緒に帰ろうとしているんだ、って聞いてるんだよ どうなんだ、涼？」

皆を代表してのことか、全身を包帯で包んだ男が聞いてきた。

「ええと、君、誰？」

「燐だよ、紅蓮燐！ 普通、声とかでわかるだろ？」「

「A h . . . W h a t , s a N a m e ?」

「日本語だよつ、俺、日本語でしゃべってるよー。」

情緒不安定な包帯の男はあらうこととか、僕の悪友である紅蓮燐を称してきた。

貴様……ふざけたことを……

「そんな冗談は止めてよ。紅蓮燐は……死んだんだから」「

「生きてるよつ、ぴんぴんしてるよー。 む、お前らも何残念そうにしてんだよ、ひどすぎんだろーー？」

男は慌てて顔の部分の包帯を外し、自らが燐だということをアピールしている。

出てきた顔が燐だということを確認してクラスメイトたちは、大

げさなほどにまで肩をすくめ、大げさなまでに深くため息をついている。中には、チッと舌打ちをかましている人もいた。

薄々気づいてはいたけど、皆は燐のことが嫌いらしい。

直訳すると、ウイ、アー、ノット、ラブ、ア、リン。字余り。

「それくらいにしておこうよ、皆。燐だって、僕たちの仲間だろ？」
「お前のせいだよ！ お前のせいで俺への不信感が積もりに積もつてるんだよ！」

「皆、こいつは燐じゃない！ 燐は自分のHGTを人に押し付けるほど無責任なやつじゃないよ！」

「おまつ、やめろよ！？ 本気で信用がなくなるだろうが…」「それは気にしなくても大丈夫だよ。すでに誰も信用してないから」「お前ホントに容赦ないな！」

はぶられでいる事実を耳にした燐は、心の汗とともに叫んだ。
燐を信用してる？ はつ、笑い話にもならないよ。

「…………でもいいんですけど、涼くん。早くしないとスーパーのタイムセール始まってしまいますよ？」

「あ、そうだね。あそこのスーパーは急がないと売り切れちゃうから

」

たしなめるように、僕の右側に立つエルが下校を促すよう言った。

そう、今日は最重要日用品である『卵』のタイムセールが四時半よりあるのだ。数限りある生活費を削らない（主にゲームの）ために、僕は何としても今日の特売でTAMAGOをゲットしなくてはいけない。

なのでこんなところで足止めを食つわけにはいかないのだ。

「『めん燐、僕急いでるんだ。皆も今度また、かまつてあげるから

『子供扱いすんじゃねえよ…』

謝罪したはずの級友たちから最近の若者に多い、「一端に大人気取り発言」が返ってきた。現在はいい歳して親に怒られた時の一トが使うことが多いこと有名である。

はあ……クラスメイト、めんどくさいな。

「ねえ、君の口からも何とか言つてやつてよ リア」

『…………』

燐たちは「リアさまがどうの」「いつ」と言っていたので、当の本人にふってみたのだが……何で、皆顔色悪くしてゐるのかな？

少し持て余し気味な僕の呼びかけに、リアは即座にうなづいてくれた。

「…………お前たち」

『は、はいっ、リアさまっ！』

口を開いたリアの声にクラスメイトたちは瞬時に姿勢をただした。僕としてはカバディのままでよかつたのに。

お構いなくとばかりにリアは続ける。

「私、涼と一緒に帰るから」

「しかし、べ……リアさま。それでは魔王さまに申し訳が……」

何かを言いかけた燐の言葉をさえぎるよつこ、リアは右手を前へ

とつき出した。

あれ？ リアの右手が青白く光つてるような……

「一度目は、言わない」

『「J、J、J、J無礼をいたしましたあ！…』

掲げられた右手を凝視して皆は見事とこづべきほどに下下座した。ひれ伏したのを確認してリアは、右手を下ろした。
だけど その手はやっぱり光つていなかつた。
でもこの集団土下座、どこかで見たことあるような……あつ！？
J、これはまさか！！

「皆の者、控えよ、控えよ！ Jにむわす御方をどなたと心得るか！」
『…………』

そして、Jで印籠を懐から

「あつ、急がないとタイムセールに間に合わなくなるよ。早く行かなくぢや」
『やめんのかよ… やるなら最後までやれよ…』

どうやらクラスメイトたちは最後までやつて欲しかつたらしい。
水戸黄門、流行つてるのかな？
とりあえず、本当にめんじくさいクラスメイトたちだと思いまし
た。

荒れ果てた戦場。熾烈な猛獸たちとの死闘の末、僕らは宝具『T
AMAGO』を手に入れた

まあ、比喩はこれくらいにして……つまり、スーパーにて

卵を買ひ「」ことができたのだ。しかも、何と二パックも！

「いやあ、エルもリアもホントありがとね。卵はお一人様一パック限りだから助かつたよ」

「いえ、それはいいんですけど……」

「べつにかまわない」

スーパーからの帰りの道で、僕は一人にお礼を言った。今回のタイムセール二人なくして、この成果はなかつた。

今月の生活費のことと思うと、感謝してもしきれないほどだ。

「いつもはおばちゃんたちの肉庄に気おされてられないんだけど、何か今日はスマーズにいったね」

通常ならば田の前に壁があるが、おばちゃんたちの肉壁が僕の前に立ちふさがつてくるのだが、今日はそれがモーセのなんかのように真っ一つに割れていたのだ。まるでそこに僕たちを通す道ができたようだ。

「けどホントにラッキーだつたね。一つ買えるだけでも儲けものだつたのに、三つもなんて！ 僕の機嫌もうなき昇りだよ」

「涼くんの機嫌はおいておくとして……でも、それっておかしくないですか？」

「えつ、何が？ 普通にツイてただけだと思つけど」

「だって他のお客さんも、店員さんも明らかに「私たち」「土下座」しましたし……やっぱり、おかしいですよ」

確かに一理ある。

そう 他のお客さんやら店員さんやらが皆、こちらを向いて土下座していたのだ。一つに割れた人垣はほとんどがそうだった。

でも僕は

「僕は、奈良県の人たちが決まった時間に、決まった方向に礼をするやつの発展版だと思ったけど?」

「涼くんの解釈は斬新過ぎますつー!」

やだなあ、革新的といつてよ。いつも見ています、ケンミンSHOW!

ちなみに僕は、浄土宗なので礼はしません。

「もうじやなくてつ……リアさんが転校して来てから、学校の皆さんを感じじやないですかつて言つているんです!」

声のトーンが上がり、なおも憤慨したよつすでエルは、リアのほうに手を向けた。

「無視しないでください、リアさん! あなたのことを見ついているんですよ! ?」

「……」

どういった理由で怒つてるのかは知らないが、エルはリアを鋭く睨みつけている。

うーむ、まるで雌雄を決する、みたいな感じだ……何かあったのかな、この一人?

睨まれたりアはそれに対抗するかのように手を細めて、

「あなたには、関係ない」

「なつ! ?」

言ふ放つたりアはビリビリ好きを向き、エルはそれ

を見て絶句している。

「おう、喧嘩か？　おいおい、お一人さん。クールに行こうぜ、クールに。」

「二人とも熱くなりすぎだよ。何があつたか知らないけど、ヒートビズは社会の常識だよ？」

「……」「……」

お前こそ何言つてんだよ、と言いたげに二人は僕に冷たい視線を向けた。

やれやれ、そんなことも知らないのかい？　仕方ないなあ、僕が教えてしんせよー！」

「「ホン……いいかい、君たち？　現在、地球は温室効果ガスによって地球温暖化が進み　」

「……」「……」

そうそう、それでCO₂が充満して

「あつ、早く帰らないと、五時から放送の『おじさんといっしょ』が見られないよ。録画してないし急がないと」

「だからやるなら最後までやつてくださいー。」「（ハハハ）」

見事な鋭いデュアルツッパリ。

先ほどまでの険悪な雰囲気が嘘のように、二人は息の合ったコンビネーションを見てくれた。そうそう、それでいいんだよ。でも、デモンストレーションというか、僕への無茶ぶり多いな……

「でもさ、一人と

「やつと見つけましたで、お姫さん。えらい探さしてもうたわ」

二人とも仲良くなつたね、と言ひ出したといふと突然、僕の言葉は遮られた。

電柱の上に立つ一人の少女によつて。ええと、パンツ見えるよ? といふか、見えてます。黒いのが。

露出^{ハラタク}、そんなことお構いなしと言わんばかりに少女は、獲物を見つけた獣のようにリアを見据えている。

「これまでちよこまかと逃げたよつやけど、わつ逃げられへんよ、姫さん? チョックメイトや」

「…………」

何も答えずだんまりとするリアと、対照的に舌舐めずりまでしている黒髪の少女。オリーブの丘でエロスと叫びたい。あ、メロスか。

「ええと、このストリッパー的なエロい人はリアの知り合い?」

「(ふるふる)」

絶対にこんなやつは違つと、何度もリアは首を横にふった。
そうか、知り合いじゃないのか……なり

「ストーカー?」

「どうして西極端やねん!」

露出魔の少女はあるつとか初対面の僕にツッコミを入れてきた。

「うーむ、しかしなんだろつか。このむずがゆい感じば

「おーい、お兄さんどうしてん? もしかしてこわがつとるんか?」

「ああ、いや……うん、その」

尾崎節で言つと、うまく言葉にできない。

何というか、こう、噛み合わせが悪いといつて、食べ合わせでおなかがぎゅるぎゅるみたいな

「はははっ、仕方ない仕方ない。普通、電柱の上にたつとる時点でそら、こわいわな？」

少女は笑いながらそう言つ。……仕方ない？

そうかつ、わかった！ 眼鏡の小学生風に言つならば 謎はす

べて解けた！

「エル！ リア！ この変な人の正体は えせ関西人だよ！」

『…………』

瞬間、空気が固まつた気がした。

しばらくして話の流れについていけないのか、二人はえせ関西人の少女のほうに冷めた視線を向けた。

「ち、違つわ！ うちは生まれも育ちも関西や！ 何を根拠に」「ほらそこへ、本当に関西人なら「違つわ」じゃなくて「ちゃうわ」だよ！」

ひどく慌てたように否定しているが、もう遅い。僕は違和感の正体に気づいてしまったのだ。

結論を言えば この子、関西弁なめどるで！

どうして ＝ なんで。

どうしたの ＝ どないしたん。

仕方ない ＝ しゃあない。

「なんで、どない、なんでやねんの五段活用を知らないなんて……」

「関西人が聞いてあきれるよ！」

「涼くん、それだと三段だけですよ……」

傍で聞いていたエルがぼそぼそとツツ 「|||を入れてくれる。そないやさけ東京もんは、と言つてやりたい気分だ。

「くっ、う、うるさいわ！ そんなんどうでも」
「そ」「やかましいわ」でしょ！？ やり直し！
「ひ、ひう。や、やかましいわ」

「声が小さい！」

「や、や、やかましいわつ！！」

「それでよし。貴様はえせ関西人から、にせ関西人に昇格だ！ 喜べ！」

「涼くん、関西弁の教官みたいになつてますよ……」

心底呆れた顔をして、しみじみとエルが呟く。

まったくその通りだ。即席師匠とはいえ、不出来な生徒を持つと苦労するよ。

仮であつても少しだけ、誰にも彼にも差別しない関西のおばちゃんを尊敬した。

6 死神に会いました

余談だけど、古今東西日本最強である関西のおばちゃんたちは、秘伝の七つある必殺技の一つ、「知らない人でも間合いで潰し」通称、たてまえブレイカーを得意としているらしい。

「あの、すいません。道をおたずねしたいのですが……」「あんた、うちこいつに見える?」「ええと……四十歳くらい、かな? それで道をたずね」「いややわ、もう一、うち、今年で六十一やで? うれしいわ、もう!」「はは……それで道を」「もう、おばちゃん気分ええわ! たこ焼き連れてつたるわ、たこ焼き!」「こや、あの」「近くにおいしいとこあるさかい、そこ行こか! ほら、はよ!」「…………はい」

おばちゃん、すいご。

「よ、いしょ、ヒ」

と声を上げながら、電柱を猿の木登り巻き廻しのよう下りてくる少女。下を見ないよつこと下りてくるところから察するに、相当のベタレさんだとこいつじがわかる。

「 つと、ふう」

トーン、といづ音が鳴る。ようやく地に足をつけたよつだ。

黒髪のポニーテールに相対的な白皙の肌。つぶらな黒曜石のよつな瞳が印象的な少女。彼女の名はえせ関西人改め、にせ関西人。

「違つ……ひ、ちやうわー。何勝手に作つとんねん…? うひの名前は

「前は

「黙れ! クソ虫な貴様の名など、にせ関西人で十分だ!」

「ひうつーけ、けび、うちは

「どうした、声が聞こえないぞ、返事はどうしたあー。」

「は、はいっ。さあ、い、いえっさあー!」

「……涼くん、もしかして教官をやるの気に入つたんですか?」

「気に入つた

満足そうに首を縦にふる。

そんな僕を見てエルは疲れたようだため息をついていた。そのまままるで、出来の悪い子を見る母のようだ。
えー、だつてこの子すゞくおもしろいに反応するし、僕も教官やつて楽しい。

今なら、スバルタで有名なヒトラーさんの気持ちが分かるかもしない。

終始教官じつに興じる僕に、びくびくとしながら少女は

「もう何やねん、あの兄ちゃん……心底、よづわからんけど、めっちゃ怖い……」

ぶるぶると震えながらに僕を見ながら呟いた。聞こえてるよ。失礼な、僕ほど人畜無害なやつはないよ。

あつ、そういうえば。

「ええと君、名前なんだつけ?」

「兄ちゃんがそれ言つんかいな!」「涼くんが言つたですか!…?」

「(うへつ)

おおー?

予想外の三人からのツツ「ミは、僕への集中砲火となつた。

名前を聞いただけなのに、なぜだ……

衝撃の出来事に驚いている僕の反応をみて、三人は大げさにため息をついていた。

「はあ……うちの名前は、グリム・リッパーや。よろしくうな

仕方なくとか、渋々といった様子で少女は名乗つてきた。

「うん、わかったよ。君は グリム・にせ関西人・リッパーさんだね？」

めが、かつこいい。

「ちょ、ちょっと待ちいや！ 何か間にいらんもんはいっとるで！？」

「ええ？ でもこいつのほうがよくないかなあ、キザカツココス」「どこがやつ、時代錯誤関係なしにダサすぎるやつー？ どんなセンスしとんねん！」

どうやらグリムさんと名乗つた少女は、この名前は納得がいかないようだ。えー、最近はミドルネームとかあつたほうが何かと便利でいいよね？

笹木・D・涼とかだったら、海賊王になれそうな気がするし。

「ああ、もうー。」Jの兄ちゃんと話してたら、全然先に進まれへん

！ まるで底なし沼やー！」

「言い得て妙だと私も思います……」

む、エルまで裏切るとほ。僕の背中は貴様には預けられんな。

僕への罵倒を言い切った後、なおも憤慨した様子でグリムさんは、

「とにかく、うちの用があんのは、あんたや、姫さん！」

びしきりとこちらに指を向けた。

貴様、人に指を向けるのは失礼な行為と知つての狼藉か！　君のお母さんに言つよー？

「…………」

「ほう、シカトかいな。自分から名乗るつもりはないよ」やな……
なら、うちが言つたるわ」

一ヒルな笑みを浮かべグリムさんは、大げさといつほどに前ふりをした。「ここのままでぐつたらどうするつもりだろー？」
場を埋め尽くす緊張感。

プラス、僕の期待と心配。芸人の親の気持ちが痛いほどに分かる。
「ならず者ぞろい、群雄割拠の魔界を統べる王、魔王が一子」

ポエムのようにグリムさんは続ける。

「魔王の数多くいる子の中で、王位継承序列一位。今や、次代の王にこちばん近」とされる

「

「ぐぐり、と僕は睡を飲み込んだ。

「魔王の、そして魔界の姫。あんたのことや、ベリアル！」
グリムさんはびしきり、とまたこちらを鋭く指す。
ベリアル……か。

なるほど、話はわかった。つまりは

「つまりは……僕のことだね」

「なんですかー？」

拉致外の発言にグリムさんは「これでもかとばかりにツッコミを入れた。

えー、そんなこともわからなーいの？

「だつて、ベリアルの「コ」は、笛木涼の「リ」だよ？ 常識じゃないか」

「だから、どうしたいうねんっ！ 全然意味わからんわ！」

「いや、だからね？ 「リ」が一文字かぶつてるから

「言つてゐることがわからんこつ意味違つわ！ そんなことでもええて言つてごねんー！」

「もううええわ、兄ちゃんに付きあつてたら、田が暮れてしまう……」
せえ、せえ、と息をきりし、一人ツツコミ運動会を終えたグリムさんはこりからをこり込んでくる。

もしかして僕、また何か悪いことしたかな？

「わかつとむとは思つたが……銀髪のあんたやー、ベリアルさん、

单刀直入に言つた。あんたの命、うちがもうこつかるでー！」
田に見えてげんなりとしたグリムさんは一人、小さく呟く。
それでもう一度、意を決したよつて、こりからを向いた。

「わかつとむとは思つたが……銀髪のあんたやー、ベリアルさん、
つまり、僕の

「せやから兄ちやんとちやつぱりともやつてー、ビリが銀髪やねん
つ、真つ黒やないかー！」

怒られた。

どうやら、またしても御呼ばれは僕ではないらしい。おかしいな……ベリアルの「リ」は、笹木涼の「リ」なのに。ペリーの「リ」も、僕の「リ」なのに。

名残惜しい心のままに、左隣に控える彼女へと視線を移す。確かにグリムさんは、「銀髪の」って言つてたから……

「何か、君のことだ、つて言つてるけど…… リア。やこのどいるどいなのや?」

僕たち三人の中に銀色の髪は彼女しかいない。
しばらぐ口を開いたりアは少しの沈黙の後、重々しく口を開いた。

「……私がベリアル」

「いや！ 僕がベリアルだつ、絶対譲らないよ！」

「兄ちゃんは黙つといて！」 「涼くんはしゃべらないでください……」

本命のグリムさんだけではなく、味方のはずのエルからも怒鳴られた。とてもこわい。

どれくらいこわいかといつと、東北にお住まいのなまはげさんぐらっこわい。大阪府にお住まいのたむけんさんの獅子舞はこわくない。

「ああ、もうー。」これから兄ちゃんは無視するつー。付き合つてられへんわ！」

「きわめて賢明な判断です」

憤るグリムさんの声にエルは同類を見るような目を向けて、うん

うんとうなづいていた。

え……そんなに僕、邪魔かな……？ 千年祭の後、都を追われるせんとくんの気持ちがわかつた。

「よつしゃ、いくで！」

「いつてらつしゃい、あなた」

ウソだろ……ホントに無視されたつー？

「出でよー。死神サテュルヌス鎌！」

すると、グリムさんの叫ぶ声とともに地面から一本の大鎌が出現した。

黒く、どこまでも黒い色をしたその鎌。柄のほうから伸びる長い鎖、二メートルはあるだろうか。

でも見た目はかっこいいけど、なぜかひしひしといやな感じが伝わってくる。すぐにでもこの場から離れたいと思いたくなるような

……

「そんな、まさか……死神つ」

そう呟いたエルは、目を見開くほどに驚いていた。

え？ シニガミって、何？ 下敷きなら持つてるけど。

「姫さん、うちがあんたに恨みはあらへんけど

そういうながらグリムさんは、身の丈より大きい鎌をぶんぶんと振り回す。そして

「ほんまにすまんな。」JETも仕事やさかい、堪忍してやつー。」

地面を蹴って、こちらに飛んできた。

僕の脳裏に浮かぶのは、昨日見たアクション映画のワンシーン。つーむ、これは……

「ねえ、エル。これ、写メ撮ったほうがいいかな？ マトリック

」

「いいから避けてください！」

怒鳴るようにエルは普段ありえないぐらいの大声でそう叫ぶと、懷に僕を抱え、跳躍した。

直後、僕らが先ほどまでいた場所は、つるぎくずくずな破壊音とともに、大きなクレーターと化していた。

7 鰐とキスは別物

「ゴオオオオオオーン！」

小規模竜巻のような風圧に乗り、辺り一帯に立ち込める砂煙が視界から自由を奪っていく。

前後左右をえ見ることのできないこの状況で唯一あるのは、聞こえるのは 音だけ。

そう、声だけだった。

「はははっ、びうしてん姫さん？ 何の抵抗もなしやとさすがにうちも良心の呵責が許されへんのやけど」

「…………」

「ハッ、まだ無視すんのかいな。この期に及んで、まだ頑固とは。言つとくけどな、いくら姫さんとはいえ、この鎌で傷をおつたら死んでまうよやで？ まあ、そないなことひがひがしいことやないんやけどな」

「…………」

「はあ、ならあの姉ちゃんか？ 違う。うちが思ひて、そりやな……あの兄ちゃんを殺せば、うちのこと憎うことか思つてくれるんか？」

「ほしたら先に兄ちゃんを」

「涼には、手を出すな！」

「やつととこつか、何や姫さん、大声も出せんのかいな。あんたは典型的な無口やと思つとつたわ。でも この場でそれは命取りやで？」

「…………」

ザツと地面を蹴るような音がした後、大きく風を囁ぐ音がした。ブォン、とかを鋭く振りきったような音。

「我ながらに卑怯やとは思つとる。でもな、お互に視界の悪い場所で大声なんか出したら、場所なんか丸わかりやんか。あんた、そんなん」こともわからんかつたんか？」

たやすく詰るようなグリムさんの声が聞こえた。

嘲笑うよつて、あるいは侮蔑しているような含みを感じさせるその声が。

さつきまでは確かにあつたリアの声は……聞こえなくなつた。

むにゅう、とした感触が僕の身体にあたつてゐる。すゝこ、やらかい。

人類の至福を感じさせるそれは僕の本能を、青春の熱いリビドーを刺激してゐる。

そう、これは 男として語らはずにはいられない！

「おっぱい 女性の胸の総称。A、B、C……大きさや形は確かに違う。だがそれは人類、いや、全生物における英知の結晶。やらかく、それでいて温かささえ感じさせるそれは、まさに……神秘の玉手箱やあ！」

「ちよ、少しば重してください！」

ぎょっと形相を変えたエルは、男の性を語る僕を抱えながらにそういうなんだ。エル……彦 凮さんはすでに自重しているよ。わづ、どこまでも続く果てしない空のように広い芸能界で

「…………うん？」

過去経験したことのない浮遊感に駆られ、怪訝に思つた僕は僕はふと下のほうに田を向ける。

今、僕の両足は地面についてないし、砂埃で見えにくくはあるが、さつきまであつた辺りの風景が全部下に見えている。

今、気づいた。

現在僕は 空に浮いている。といつが、

「飛んでるよつ！」

「今せうですけどね……」

「ははははっ、飛べない豚はただの豚！ 飛べるエルはただのエル！」

「何でしじうね……こひ、ものすごく失礼なことを言われている気がするんですが！？」

初めての体験に興奮気味の僕の声に、エルは相変わらずの凶々（まちまち）なテンションである。

「え、何でそんなにテンション低いの？ 飛んでるんだよ？ ライト兄弟もびっくりだよ？」

イエスに代わって、僕はジーザスと叫びたい。

「金髪の姉ちゃん……あんた、人間どちらかつたんやな。まあ何となく感じてはおつたけど」

依然とたちこめる砂煙。

飛行中の僕らの真下にできた大きなクレーターの中で、眉間にしわが寄つたままのグリムさんが口尻を上げて、呟く。

しかし、グリムさんの倦怠そうに向けられた表情にも、エルは憮然とした表情で、

「そういうあなたもですよね？」

「死神さん」と皮肉そうに口を

歪めた。

笑いながら、そして黒いオーラを撒き散らしながら会話を交わす二人。

うーん、何やら楽しそうだ。うらやましい。

「ねえ、ねえ。僕も混ぜて？」

「涼くんは静かにしていてください」「兄ちゃんは黙つといてくれるか？」

仲間にしてほしそうな顔をする僕のほうを見向きもせず、二人は真剣な表情で睨みあつていた。

笹木涼 を 仲間にしますか？　はい／いいえ

エル と グリム は いいえ を 選択

笹木涼 は 悲しそう な 顔 を した……

いじめ、かっこわるい。

「その白い翼……天使か。それも八枚羽の天使長。姫さん追っかけてただけやのに、こら、えらい大物が釣れたわ」

「御冗談を、あなたもそつなのでしょう？ 大鎌を持っているのは、死神長ということだったはずですから」

腹を探り合つための交わされる一つの言葉。

お互いを值踏みするかのようにぶつかり合つ一つのまなざし。

両者ともにわずかにも隙を見せない、そんな確固たる意志が表情に垣間見えていた。

「ああ、その通りや。一応、姫さんは魔王の姫つてことでヘルやつたし、形式的にうちが出てきたわけやけど……まあ、そないな気遣いも必要なかつたけどな」

「うーん」と、エルに見せつけるように自分のもつ大鎌に付いた液体をじゅわ、とふり落つた。

「その、リアさんは……どうしたんですか？」

言葉に詰まりながらもエルが問う。心なしかその声が震えていた。
「感触に手じたえはあつたしな。それに、この鎌に切られたら魂ごじせりばりになるし……な」

「……………ですか」

悪びれる様子など微塵もなくグリムさんがそう答えると、エルはそつと目を伏せた。

「それでや」

会話に仕切りを入れるような声。

声の主であるグリムさんは再び鋭い目でエルをにらむ。

「どないするか、天使長？　あんたらからしたら、魔族の姫さんはどうでもええんやろうけど、うちは死神や。あんたらの忌み嫌う存在、や。……何なら」ヒド戦つてもええけど

ジャリ、と長い鎌を鳴らし、大鎌をかまえた。

別にやるならやつてもいい、とまるで誘つているかのように。

好戦的な態度をとるグリムさんのそんな様子に、エルは左右に首を振った。

「いいえ、遠慮させていただきます。私としては本意ではありませんが……一般人の涼くんを巻き込むわけにはいきませんし。あなたもおわかりのはずですよね？」

と、エルは僕を見る。

女神のような慈愛に満ちた、そんな顔で。

普段の僕なら「おっぱいで顔が見えない」とか言つはずなんだけど……なぜか、言葉に詰まってしまった。

エルの。その わが子を守る母のよつな、そんな顔をされたら。

「……まあ、そっかがええんやつたら、うひなみええけど」

キヨトンとした表情を見せるグリムさん。

数秒の沈黙の後、何か腑に落ちない様子で大鎌を退いた。

「ほんまにええの？」

「何度も聞かないでください、私の気が変わらないとも限りませんから」

わかりきった答えの一一度聞きを、エルは機嫌悪そうに返す。

それを聞いてグリムさんは、ほり、と一息つく。そして踵を返す。

「そしたら仕事は済んだし ほな、遠慮せんとうちは帰らしてもううわ。兄ちゃんも悪かったな。もつ会わんとゆづなビ達者でな」

グリムさんは最後に僕のほうを向いて、地面を蹴り、飛び去っていった。

その後、少しの間があく。

一人だけが残ったその場には何か言い、「うー、ばつが悪い、そんな空気が漂っている。

わけのわからない」とだらけの状況から、ようやく落ち着いた僕はエルに話しかけた。

「……ねえ、エル」

「何ですか、そんな藪から棒に？」

「さっきから思ってたんだけど……背中から羽、生えてるよ。」

「ホント今さらですよね、それっ！？」

シリアルな空気が吹き飛んだ。

宇宙でもないのに浮遊体験をしていた僕は、エルとともに再び地面に足をつけた。帰ってきたよ、地球よ。

「さあ、エル！ 洗いざらい白状してもらおつか！」

「こきなりですね……それにす」「コレクションですね

ぼそぼそと何か言っているが、僕にはそんなことどうでもいい！ ジャケットのいちばん上のボタンへりこどりでもいい！

「エルは僕に言わなきゃいけない」とがあるはずだよね！？
「それは……」

追及に口ごもるエル。

なおも必死に僕は彼女に訴える。

「たつた一人だけの幼馴染でしょ！？」「うううううう隠し事はなしでいこつよ！」

「…………」

そう、僕たちは幼馴染。
いつも、何でも一緒にいた。
だからこそ、こうううううううとはちゃんとしたけじめをつけて、キチ
ンとしておきたい！

「タイムセールで買った僕の卵、どこやったの！？」
「ええっ！？ そっちですか！？」

思わず仰け反るくらいにエルは思いつきりに驚いていた。
そつちつて、なんだよ！ 僕にとつてはそつちがこつちなんだよ
！ のつち、どこいったんだよ！

「はあ……わかつてはいましたけど、涼くんは本当にすいこですね

一周回って、呆れたような顔でエルが呟いた。
ふん、今さらほめたって僕は騙されないぞ、このヤロー。ほめて、
もつとほめて。

「僕はほめられてのびる人だよ？」
「自分で言つ人初めてみましたっ！」

やだなあ、偉大な先達たちがいるじゃないか。決して口にはできないのだけれど。

「涼くんは本当に……とか、やつれの」とかはスルーなんですか?」

「やつれの」と?」

ツバメ返しではなく、オウム返しが」とく、僕は問い合わせる。返答に詰まつたのか、苦い顔をしてHルは眉をひそめる。

「ほら、死が……グリムさんのこととか、その……私のこととか」

必死にといふが、えらく継ぎ接ぎではあるが、エルは呟いた。
「一む、そのことか。

さつきの地面が吹き飛んだりとか、空飛んだりとか、羽が生えていたりとかのやつ。

「うん、大丈夫。それはもうわかつてゐから」

「え、そりなんですか?」

キヨトンとするHルの問いに、僕は当たり前のよつとなづいた。
なんだそんなどとか、と。

僕は何氣なく

「中一病だよね?」

「あれだけのことがあつてそれが言える人も初めてみましたっ……」

驚愕の色に顔を染めるHルは一息で叫んだ。すじこ早口です。

「そんなことより、卵だよ。せつかくタイムセールで買ったの」。

「ここでなくなつたら意味ないよ」

「そんなこと……ですか……?」

「うん、そんなことだよ。所詮はね？」

張り裂けてしまった場の雰囲気にエルは肩を落とし、大きため息をついていた。

えー、卵、大事だよね？ ポケンとかでも。

生存本能の赴くままに、僕はきょろきょろとTAMAGOを探す。排水溝、ない。電柱の裏、ない。畑の中、あつ！ ミコのタマゴ！ でもいらない。

「ないなあ……卵……どこいったんだろ」「

悩ましげに僕はおもわず、ため息をついてしまう。

一度、どこでなくしたんだろうか、と振り返つてみる。

スーパーを出た 三人で帰つていた えせ関西人が現れた

飛んだ ……なくした

うーん、問題は出るとき誰が卵を持っていたか、だけど。……そ

うだ！ 確か

その時。不意に後ろから声がした。

「……涼」

透き通るような銀色の髪に、少しの濁りもない純白の肌色を持つ少女。

そこにいたのは リアだった。

夕日を背に立ちすくんでいる彼女のその手には、タイムセールでゲットした卵パックの入った袋をしっかりと握っている。

生き別れの妹に会う兄の」とく、僕は急いで駆け寄った。

「リア！ 卵！ どこいったのさつ、心配したんだよー！」

「それ、卵も一人に入りますよね……」

僕の後ろを追ってきたエルがさりげなくツッ 「んぐへる。
そんなことはいいんだ。今は卵とリアのの生還を喜ばつー。いや
あ、ほんとによかった。

「いやあ、リア。卵持ってくれたんだね。ホントにありが
「涼」

「え?」

名前を呼ばれ僕は顔を上げて、リアのほうを見た。瞬間。
口を ふさがれた。
あたたかくて、やわらかい。
優しくほのかに香るシトラスのことともこ……彼女の匂こ
つて。

8 シュラヴァルハラ

キスをされた。

呆然と立ち尽くす僕の頭がそれを理解したのは、彼女の顔が離れてしばらくしてからのことだった。

キス、鱈、キス、鱈、キス……

サカナくんA 「わよ、わよー…？」

サカナくんB 「わよ、わよー、わよー、わよー…」

サカナくんC 「わよ、わよ、わよつまつー！？」 げほつ、「ほー…」

…… 風邪かな

「な、な、な何をしてこるんですかっ！」

狼狽を含んだその声で僕は我に返る。
あぶない、あぶない。もうちょっとで、リアルさかな天国にいく
ところだつたよ。

声の主であるエルは、先ほどまで固まっていたのだがよつやくと
いうか、僕たちのほうへ詰め寄ってきた。
そして般若よりも怖いだらう表情で、僕とリアの間に割つて入つ
てくる。怖い。

「リ、リ、リアさん！？」 い、今はいつたいビリウシつつもりです
か！！

「端的にいえば、ペーゼだよ？」

「涼くんには聞いていません！」

怒鳴られてしまった。ペーゼって、キスのことだと思つたんだけ
ど……もしかして違つた？

「もしかしたら……人工呼吸、かも？」

「どうして疑問形なんですかっ。といつか状況的に絶対必要なかつたですよね！？」

「イチゴ味じやなかつたよ？」

「そんなことは聞いてません！！」

ものすごく怒鳴られてしまった。

昔の人たちはファーストキスは、レモンやら、イチゴの味がするとか言ってたけど、嘘だね。おいしくなかつた。僕はブルーハワイ味がよかつたのに……

ものすごい剣幕をはらんだ目でエルは、先ほどからどこ吹く風を決め込んでいるリアを睨みつける。

「リアさん、いえ、ベリアルさん！ どうして涼くんにあんなことしたんですか！」

「……あんなこととは？」

「え……？」

わざかに首をかしげ、キヨトンとして問い返すリア。

「い、いや、それは……その。キ…ス、といつか、チ…チュ…といつか……」

本人としても思わず返しだったのか、エルは顔を真っ赤にさせながらもじもじとしている。

やつとの思いでせつかく編んだ言葉も声の小さな咳きとなつてしまっていた。

「その……つまり、は……」

「ペーぜのことだね？」

「実際問題そうすけど、涼くんは表現が直接的すぎますー。」

小学生レベルの恥ずかしがり屋さんであるエルは赤面のままに叫んだ。真っ赤になつたその顔は練馬のポストくらい赤い、品川ほどではないのだが。

言い切つた甲斐があつたのか、ビリヤリリアには伝わつたようだ、

「もしかして、キスのこと？」

「そ、そう！ そのことです、それが聞きたかったことです！」

意氣消沈していたエルは水を得た魚のように復活した。まるで芸能界の波に打たれた魚人界の英雄、サナくんのようだ。勝手なその様子を気にするでもなく、リアは言つた。

「……確かめたの」

「確かめた？ いつたい何を確かめたといふんですか、キスに関係ないですよね？」

至極曖昧な答えにエルは怪訝そうにリアを見る。しかし相変わらずとこつか、彼女の顔に表情らしきものはない。そして相変わらずの貧乳。

「……それは」

「僕のくちびるの味をだよ？」

「そのためにキスするとかどれだけ変態の人ですか、それー？」

エルは、ぎょっとしてリアから距離をとつた。ひどい。

「失礼だよエル。ちなみに僕は甘めのほうが好きだよ？」

「ええ、涼くんの性癖だったんですかっ！？」

表情をひきつらせたエルは僕からも距離をとった。^{マジ}Mの人に言わ
れたくない。

しばらくの弁解の後、僕にもリアにもそんな性癖はないということ
と信じてもらつことができた。

最初はそれこそ、遊園地にいるキグルミのお兄さんの反応を見る
大人のような視線だつたけど。夢の王国のネズミさんも大変だと思
う。

「もう！ 涼くんは肝心なところで邪魔しそぎですっ！」

「僕は、邪魔シーマンだからね？」

「何か、脇役っぽいですっ！」

人面のお魚さんに謝れ。

「……王の」

「え？ 何か言つた？」

ぼそりとリアが口を開いた氣がする。だがしかし、聞き取れない
ほどの眩き。

訝しげに思つた僕とエルは、再度問い合わせるよつて声を上げた。

「魔王の力を、確かめた」

今度こそはつきりとした口調でリアは答えた。

「マオウ？ うーむ、魔王、か……

「うーむ、確かに僕は皆から、『暁の魔王』と呼ばれているけど…
…それと何か関係が？」

「関係とか依然に、何かいやらしきですっ！」

不潔ですか、とエルは叫んだ。

うーん、僕の学校での呼び名なんだけどなあ。まあ理由は知らないんだけど。

リアは続けて言葉を紡ぐ。

「涼の中、魔力がいつぱいあつた。だから魔王。私の婚約者」「ち、ちょっと！ ちょっと待ってくださいーーい、今何で
「はい、タイム入りましたあ！」

「気が散るので涼くんは黙つていてくださいーーー！」

怒られた。まともにかまつてもられないで、ちょっとぴり傷ついた
今日この頃です。

黄面に浸る、そんな僕を無視してエルはリアのまつに向き直す。

「い、い、い、い、い婚約者は、どういう意味でしようか？」

ひきつり気味の笑顔、噛み噛みの言葉でエルはたずねた。必死に
取り繕おうと努力しているようだがひきつった表情がまったく隠せ
ていない。

あごに手を当てるリアは一瞬の沈黙の後、ゆっくりと口を開き、
答えた。

「涼は私の許嫁。魔王の後継者、だから

「え？ 何、どうしたの？」

言葉をいつたん切つてリアは僕のまづく田をやる。

ただの一般市民である僕を見つめるそのまなざしがやけに真剣そ
うだった。含むことなく、そして言い放つた。

「涼は私のもの」

せめて……僕の価値は、プライスレスといつてほしかった……

まあ、そんなこんなで現在に至るわけでして。
路地の真ん中で言い争うことは大変邪魔極まりなかつたので場所
を移して、源莊七号室。

通称、僕の部屋。正式名称も僕の部屋。
すでに廃れていることで有名なこのアパートにて、先ほどの論戦
の続きが行われているわけだけど……

「……涼は魔王。決定事項」

「だから、そんなのずるいって言つていいんです！　それに私たち
は幼馴染ですよ！？」

「私は、転校生」

「うんうん、ギャルゲー萌え要素としては、いい勝負。つまりは互
角だね？」

「涼くんは黙つていってくださいー」「黙つてて」

邪魔者扱いというか、なんか最近こいつの多いな、と僕はしみ
じみと思った。人生に悩めるアラフォーサラリーマンの気分だ。
反論するエルは思い出したように切りだす。

「だ、だいたい！　私と涼くんは小さいころからずっと一緒にいた
んですよ！？　遊びも、食事も、その……お、お風呂も……」

「一緒に入つてたよね？ 小学校の」

「つー！ と、ともかく！ どっちにしても私のほうが先に涼くんと接觸しているわけですし、後から出てきたあなたの出る幕はないんですつー！」

具体的な事情を話そつとする僕の言葉をさえぎり、エルは必死そくに叫んだ。

「り、涼くんには、神に……後、私の…旦、那さんにも……」

彼女の顔は火を噴いたように真つ赤になっていた。小さすぎて僕には聞こえないぐらいの咳きだつた。しかし、頑なに断固としていたリアも黙つてはいない。

「涼は私のもの。これは、魔界の総意。だから、絶対「そんなの私だつて、主神や神族たちの決定で来ているんですつ、だから絶対に譲りません！」

ぐぬぬぬ……とうなり声が聞こえて来そうなくらいに一人は熾烈ににらみ合つ。バチバチと火花さえ飛び散るがごとくだ。間の火で花火したいくらいだ。

「というかさ、聞きたいんだけど……」

「はい？」 「何？」

何気なくついた僕の咳きに、一人はくいつと顔をこじり方に向ける。

「ええと、はつきり言つとだね……何の話だつて、これ？」

「今までわかつてなかつたんですか！？」

「うん、ぜんぜん」

迷うことなく僕は「クリとつなづく。

それを見てエルも、リアも顔を見合わせ、途端に深々とため息をついていた。

人間、ため息をつくと幸せが逃げていくらい。マメ知識だよ？やれやれと言った様子でエルは「いいですか？」と前置きをして、僕に話し始めた。

「この世には、人間の住む『人間界』のほかに、『魔界』、『天界』、『地獄』という世界があるんですね。ここまではいいですね？」

「ふむふむ」

「そしてそれらの世界を統べる者。魔界から順に『魔王』、『神』、『死神』と呼ばれる者たちが支配しています。私、リアさん、後グリムさんとかがそうです」

「……ふむ」

「魔を統べる魔王は神に仇なすもの。天を統べる神は死神を滅するもの。死を統べる死神は魔王を死へいざなうもの、とこの関係性は似て非なるものですが、じゃんけんに似ていると言つていいでしょう」

「……」

「まあ、他にも例外はあります、とりあえず今は魔王からの使者が、リアさん。神からの使者が、私。と理解してもら……涼くん？」

「ZZZ」

「寝てる！？ お約束過ぎませんか、それっ！？」

「……寝顔かわいい」

「ちょ、リアさんも何言つてるんですか、って、な、何しようとしてるんですかっ！」

「もう一度確認を」

「だ、だめです！ に、一度もなんて絶対させません！ 私だって

……一度も……」

「うるさいなあ……君のハートを蠅人形にするよう……にやむにやむ」

「寝言、こわすぎですっ！ 猶豫的すぎますー！」

ジャックザリッパーもびっくりの発言に、エルは悲痛に叫んだといつ。

閑話休題 その後、僕は晩御飯の時間まで目を覚ますことはなかつたらしい。

9 死んだのは……

涼。お父さんみたいな、魔王には十分に気をつけなさい。お母さんはあまりのかっこよさに神の使いであることすら忘れて、うつかり惚れてしまったから…… キヤツ！

何故か赤く染まる頬に手をあて、くねくねしながら言っていた、母さんの言葉だ。

涼つ！ 母さんみたいな、美しい勇者とかには注意しろよ？ 自分を倒しに来る天敵を父さんはうつかり一目惚れしてしまったがな！ ガハハハハッ！

「いらっしゃる何故だか豪快に笑いながら、意味不明なノロケ話を語る、父さんの言葉だ。

いつも夫婦喧嘩（主に甲冑とか着たチャンバラ）のあと、べつたりとくつつきながら、両親たち一人は決まってそう言つてくれる。言わせてもらえば、僕にはそのチャンバラについてすら理解できないのだが。

ハア、魔王？ 勇者？

そんな突拍子のないファンタジーな話はどうでもいいんだよ。三十歳になれば、いやでも魔法使いになれる人はいるよ。

限りなく適当にではあるが少なくともこの時、僕はそう思つていた。

「なっ、また涼くんに……ちょっとリアさん……いらっしゃり何でもくつつきすぎですっ、離れてください！」
「そっちこそ離れるべき。余分な脂肪、邪魔」
「なっ、脂肪つて！ 私はべつに太つてなんか」

「……間違えた。その肉田ぞわり、邪魔」

「な、何も変わらないじゃないですか、といつかひどくなつてます！ だ、だいたいこれは」

「OPPAI……だね？」

「そ、そう！ おっぱーって、何言わせるんですか、涼くん！ あまりに真剣な顔だつたので、騙されかけましたっ！」

ちつ、惜しかつた。もう少しでエルの口から、ポロリ発言がでやうだつたのに。やつぱり、ニヒルな顔より、アヒルな顔のほうがよかつたかな？ 主にくちばしとか。

試行錯誤を始める僕の様子を見て、げんなりとするエル。

「どうしたの？ 体調でも悪いの？」

「はあ……昨日あんなことがあつたのに、涼くんは相変わらずですよね。私なんか一大決心したのに……」

またもエルは深々とため息をつく。

その姿は、家庭にすら居場所のないアラフォーサラリーマンのような、居たまれない雰囲気を醸し出している。

リアに当たつてるのもそのせいになのか。やれやれ、しうがないなあ。

「ほり、リアも謝ったほうがいいよ。ただ、エルの豊満なおっぱいを分けてほしかつただけだよね？」

「…………いらない」

口ではやうはやうつが、ちらちらとエルの胸を凝視している。とにかくにしておられる様子だ。

「ほり、エルも。リアも謝つてるし、「べ、べつにおっぱいを分け

てあげなくもないんだからねっ!」とこう感じで許してあげなよ

「…………

「まったく、一人とも素直じゃないな。この国のことわざに「おっぱい両成敗」というのがあってね? これは乳差別を無くすべく、平等におっぱいを分けようとしたやつ

「間違ってるとか以前にもはや、どこのからシッコンでいいのかわからせんっ!」「(こへー) (こへー)

あれ? ツンデレは正義、とこう言葉があつてだね? と続けるつもりだったのだが、僕のことわざ教室は一人によつて阻まれてしまった。

「これだから、ゆとり世代は!」

若氣の至りだよ、若氣の至り。

……おっと! あぶない、あぶない。もつかよつとで、頭の中の悪魔くんにぬとつ漫かりにされてしまつといふだつたよ。若いつて怖い。

冷や汗をぬぐう僕を見てエルとリアは、息ぴったりに崩つて肩を落とした。

がつくづとしたようすのエルは、半眼で僕を見た。

「わかっているんですか、涼くん。昨日は死神に襲われたんですよ? それなのに、こんないつもどおりに登校して……こわいとか思わないんですか?」

「僕は、まんじゅうがこわ

「そんなオチのない話は聞いてませんっ!」

「年をとるのが、こわいこわいと言いながらも、なんだかんだでここまでやってきましたなあ、ばあさんや

「えつ、私にふるんですか!/? え、えつと、そうですが、じーさ

」

「まあ、こわいと言えば、こわいけどね
「無茶ぶりな上に、スルーですかっ！？ こわいです！」

驚愕に打ち震えエルは、現代社会における恐怖を叫んだ。具体的には、現代の冷たい政治や社会風土に対しても、そんなことは気にせず僕は真剣な顔をする。

「確かに昨日の地面が爆発したり、急に飛んだりしたのはこわかつたよ。えせ関西人は、地面から鎌出しし、エルの背中からは羽生えるし」

「…………」

唇をかみしめエルは、ぎゅっとスカートのすそを握りしめ、下に向いた。

少し気にはなったけど、僕はかまわず続ける。

「でも爆発の時、すぐにエルが飛び込んでくれたのは何か……嬉しかつたんだ」

「涼くん…………！」

「かつこよくて、それでいて温かくて。なにより おっぱいが大きかつたから！」

「…………はあ」

心底、やつぱりか、という感じにエルはため息をついた。
む、結構いいことを言ったつもりなのだが。女性はおっぱいをほめるといつて、燐がいつてたのに。もしかして、ガセかな？

「おっぱいが……大きかったから！」

「一回言わなくても、わかつてます！」 聞こえてます！ 聞こえて

「… いてもあえて、流したんですつーー！」

たたみかけるようにエルは三拍子で叫んだ。リズミカル、かつこいい。

「あ、そういうえば、と僕は手をポンと叩く。

「… どうかせ、リアはいこの？」

「… 何が？」

キョトンと首をかしげるリア。

「いや、昨日のグリムさん。よくはわからないけど、何か君を退治しに来てたみたいだし。それに君は倒されてないよね？」

「（ひくつ）」

「あ、それは私も気になつてました。あの死神は間違いなくやつたと言つていましたし。いつたいどうひやつて、あの場をやり過（）したんですか？」

彼女を心配した僕の問いに、エルも便乗してくれる。

昨日。グリムさんこと、えせ関西人は確かにリアを仕留めたと言つていた。それは僕も耳にしているし間違いはない。だけど、今こうしてリアはここにいる。

僕らの質問に少しの間をあけて、リアは

「… 卵」

「え？」「はあ？」

『卵』と口にした。TAMAGO? ゆで卵とか、目玉焼きにでき

る、あの卵? とある有名人が好んで食すといつ、あの。一様にぽかんとする僕たちを見て、リアは続けた。

「鎌に卵を切らせた」

「あつ、なるほど！ 身代わり そういうことですか。それなら納得がいきます」

「え？ どうこいつ」と？」

一人、エルは理解を確認するように何度もうなづいていた。
そしていまだに思案顔をする僕のほうを向く。

「ええとですね、死神の鎌は切った対象を必ず死に至らしめるものなんです。それはリアさんとて同じことで、切られたら当然死んでしまいます。しかし

「しかし？」

「あの時、地面の爆発で砂煙が立ち込めていましたよね？ 視野の悪い中、リアさんを切ったかどうかなんて切った本人にも判断できません。本当はリアさんの持っていた卵を切つけていたとしても、リアさんを切つたと思いこんでしまうわけです。つまりは」「つまりは、死んだのは卵、というわけだね？」

「正解です。リアさんは卵を身代わりにしたということですね」

はつとした僕の問いにその通りと、うなづくエル。
なるほど……じゃあ、なおさらだよ。

「リアは身を隠さなくていいの？ また狙われるかもしれないしさ、危なくないの？」

「それはない

眉一つ動かない無表情で、リアは断言した。
え、なんで？ また、グリムさんみたいなのが来るかもしれない
のに。訪問販売お断りのシールでも貼るのかな？

言葉の事実を疑つような僕の顔を見て、リアは

「学校にいけばわかる。心配いらない」

ただ、そう言った。

「確かにそうですね。うちの学校は特殊ですけど、やつこいつといひは面倒見がいいですから。基本的に大丈夫でしょう」

今度はリアの言葉にエルが便乗してきた。
学校？ それって 神魔高校のこと？

「ねえ、いつたい何」

「わっ、もうこんな時間！ 急がないと遅刻しますよー。で、涼く
んも走つて！」 「（こくり）」

またも一人のフォーメーションに阻まれ、僕は「何のこと？」と
聞くことができなかつた。

いつもは仲悪そうなのにこいつときだけ連携プレイがつましい。
それにして、神魔高校。

とりえは、変人校長だけじゃなかつたんだね……

「あっ、卵つてもしかして……タイムセールでゲットしたやつのこ
と？」

「（こくり）」

「貴様つ、こじで会つたが百年目！ 死んだ卵の無念、晴らしてく
れるわっ！」

「何やつてるんですか！ 早く行きますよっー！」

「TAMAGO……君のこじとは忘れない。さらば友よ、FOREVER
ER……っー！」

「卵と友達だったんですか……ちょっと目も当てられない状況ですね」

「ん……？」

予想以上に事情聴取に時間をとってしまったので、遅刻しないため、足早に学校まで駆けていくと、門の前の人だかりができているのに気がついた。

時計を見ると、もう予鈴五分前のチャイムまであと少ししかない。ピンチにやつてくる超男ウルトラなアーチも三分の体力が切れかかってくる時間だ。それにもかかわらず、大勢の生徒たちは校門付近で揃つて足を止めているのだ。

「どうしたんだショウカね。皆さん、中に入ろうとしないで……昇降口に何かあるんでしょうか？」

「つまりはペンギンさんのことだね？」

「ええと……どうこう意味が説明してもらひていいですか？」

「いいよおー！」

身振り手振り大げさな僕の反応にエルは顔をひきつらせながら、口元をひくひくさせた。

やれやれ、そんなことも知らないとは。無知とは時として罪なのだよ、と有名なあのお方もおっしゃっていたのに。

「つまりね？ 寒いところに在住のペンギンさんは、氷の上から海に飛び込む時、一瞬ためらうんだよ。ぬくぬくとしたところに在住の一ートさんは就職をためらうんだよ」ということだね」

「言つてることの主要部分はわかりましたけど、最後の意味わかりませんっ！」

エルは報われないニートたちのために叫んだ、かもしれない。熟練したニートたちと面接官の熱い戦いが容易に予想できる。結果はもちろん、ニートの惨敗だ。主に社会的な面で。

「」で一句。

冬寒い（ふゆさむい）

人は冷たい（ひとはつめたい）

社会です（しゃかいです）

ニートになれば（にいとになれば）

夢のようです（ゆめのようひです）

字余り。

「なぜそんなに清々しい顔をしているんですか……？」

冷めた目でこちらを怪訝そうに見てくるエル。

彼らの気持ちをわかつてくれ……わかつてくれよ、エル。

「エル……社会って厳しいよね。今じゃ政治はガタガタだし、就活なんか、渡る世間もなんとやらの時代だよ」

「？まあ確かに最近はそうですけど……でもそれがどうかしたんですか？」

「いや、ニートたちの責任転嫁も一理あると思つてね。俺たちが働かないのは国が悪いからだ、も正論かと思つ

「絶対、無責任ですよね！？」

「まあつまるところ、ニートとオタクを一緒にするなつてことだね

「もつと意味がわからなくなりました！」

最近は働く稼ぐ、ニートなのにニートでない、NEOニートがいるらしい。新人類だ。オタクがNEOオタクになる日はいついいつになるのやら……今づき期待！

「どうでもいいけど、とりあえず校舎のほうにこいつよ。元気にしておいて」

「……そうですね。ホント、そうですね」「(汗)

ガンガンいこうぜという僕の指示に、二人は応じた。片方はがつくりとしてうなだれているのだが。

校門のところまで行くと、集まっている生徒の人だかりがより大きく感じたのも一瞬のことだった。

『お、お、おはようございます、リアさまー。さ、今日もいい天気ですね!』

「……おはよー!」

合唱のような声とともにまたしても半分くらいの生徒が土下座した。Mクラスメイトだけじゃなかつたのか、この学校。

リアは小さく挨拶を咳き、表情のない顔を持続させている。

それにも朝から土下座とは……シユールな。シユール大賞があつたら、ノミネートしたい。

魔族とは、いつもこんななの? とHルに目をやり、問うてみると、

「そうですね……私も詳しいことは知らないんですが、魔族は徹底した階級制度によって成り立つてるので、リアさんのような姫や、王といった階級の人たちは崇めるべき存在、ということでしょうか」「つまり、歪んだSMだね?」

「歪んでいるのは涼くんの心ですっ!」

失礼な、僕ほど心がまつすぐなやつはないよ。まつすぐすぎてガードレールにぶつかるくらいだよ。心の「Fがいるぐらいだよ。

「お前たが。『うつじて進まな』」

前方で土下座継続中の生徒たちを見てリアは眉をひそめる。あまり変化はないのだが、不満をのぞかせたリアの表情を察してか、生徒の一人は戦々恐々としながらも口を開いた。

「そ、それは昇降口のところ……」

恐る恐るそれだけ呟くと、土下座生徒たちは校舎の 昇降口のあるほうへと揃って視線を向けた。

首を傾げる思いで、僕らもそれに倣うようこちらを向くと

「あっ、ウロちゃんだ！ おーい、ウーローちゃん！」

「ウロちゃん、ですか？ それって誰のことかつて前も聞いた
あればっ！」

「……ウロボロス。なぜ」

順に僕、エル、リアはそれぞれ各自の反応を口にしていった。
飛び込んできたのは目を惹く炎色の髪に、深い紅色の瞳の少女の姿。

そして、どこからどうみても幼女にしか見えない、本人いわく、二千歳強の合法口リ。

僕のゲーム友達である、ウロちゃんがそこにはいた。

「だからこの上で呼ぶなと言つておるのじゃー」

憤る叫び声とともにウロちゃんはこりり振り返った。おお、気づいてくれた。

幼女特有のソプラノボイス。

人目もばからぬ響き渡る声のシッ！」

「ねぞ、ウロちゃんの真骨頂「ロツシッ！」！」

「エーハウス君ですか、涼くん…？ エーハウス、あの魔王の姫君とお知合いなんですか！？」

どういうことだ、と言わんばかりに というかすでに言つてゐる
けど、エルとリアの二人は僕に詰め寄つてくる。
話題の本人であるウロちゃんも、僕のところへヒトタトタと駆け
てくる。

『やあやあやあやあ、壇上がきたやあやあやあ。』

土下座生徒たちは即座に身をひるがえし、悲鳴とともに去っていった。校舎とは逆のほうに。つた。

集団で授業をハッキングとは……やるな
若人たちよ お主らも
所詮、ゆとりというわけか……

い。二十九の想一しき。十四年九月。目録にいたる。

「お主っ、何度言つたらわかるのじや！　妾の名は、ウロボロスじや、ウ・ロ・ボ・ロ・ス！」

「聞けえええええ！」

ウロちゃんは奇声を上げた。個人的には「キエエエ！」と言つてほしかつた。ゲーム仲間のウロちゃんになら通じると思つたのに……

「で、ウロちゃん。今日はなんで外でてるの?
」もつのはずでしょ?」

「はあ……お主は本当に……」

突然がっくりとして、深々とため息をつくウロちゃん。
「うーむ、僕、何かしたかな？ それともウロちゃんの調子が悪い
のかな。

「それで、涼くん。結局、この方とはどういった関係なんですか？」

「（こくじ）」

「あ、うん。この子は僕の友達のウロちゃん。エルには前に話した
ことあったよね？ ほら、昨日の昼休みに」

「ええまあ……でも、ウロちゃんさんが竜王の姫だなんて、聞いて
ないです！」

「え？『竜王の姫』って、何？」

「知らないで友達になつてたんですかー？」

「うん」

僕は迷わずその問いに答えた。なぜかエルは驚愕しているが。
当然だ。ウロちゃんと僕は友達なのだから。

旧校舎に初めて入つたあの時も

「わっ、何やつじやー！ ここには誰も入れんように結界がはつてお
るのにー！」

「君は……幼女だね？」

「し、初対面から失礼なやつじやなつ！」

「お化けの正体は、口リツ子か……せつかく捕まえようと思つてた
のに。モン ターボールで」

「ゲーム感覚を実行に移すとは、獵奇的なやつじやなー！」

「えつ、君、ゲームやるの？ ジヤ、ジヤあ、ドロク工知つてる？
う、うむ。少しならば」

「やつたあー！ エルはゲーム出来ないし、対戦はあきらめてたけど

……」これでようやくできるよ。」

「お、お主。妾のこと、こわく

「僕は、笠木涼。君は？」

「妾の名はウ、ウロボロス、じゅ

「そつか、じゃあ、ウロちゃんだね。これからようじへ、ウロち

ゃん

「ま、待て。その名はちょ

「

僕自信としては探検のつもりだったんだけど、結果としてウロちゃんと出会うことができた。

それからというも、時間ができてはまぐまぐとウロちゃんのところ（旧校舎）に遊びに行ったりしている。ゲームしたり、いろいろ話したり。

とにかく、ウロちゃんは僕の大変な友達だ。

「うん。間違いなくウロちゃんは、僕の友達だよ」

「お主……恥ずかしいことを何度も言つな

そう反論するも、ウロちゃんは頬を赤く染めて照れている様子だった。ウロちゃん、かわいい。

眺めていると、ウロちゃんは「ゴホン」とわざといらしく咳をついた。

そして ハルとリアを鋭くにらみつけた。

「それでお主らは何者じゃ？ 妾の呼び名を知つてあるからには人間というわけではあるまい？」

「申し遅れました。私の名は、ラファエル。天界において主神を守護していた天使長です」

「魔王の娘、ベリアル。よろしく」

ウロちゃんの問いに、一人はすかさず答えた。

何やら、三人の間でバチバチと火花が散っているように見えるのだが、気のせいだと思いたい。

「あつ、僕の名前は 笹木涼で」

「知つてますつ」「知つてる」「知つとるわー」

総合評価で僕の知名度ポイントが3上がった。

なぜか、既視感を覚える今日この頃

「ウロボロスじや。皆の者、これよつよろしく頼む」

朝のHR。

あの後、何とか遅刻を免れた僕だったが、今は目の前の事態に唖然としている。

教壇に立つのは、見覚えのある炎色の髪をした少女。背丈に合わない制服で身を包んだその生徒は、先ほど校門で遭遇した ウロちゃんだった。

皆は口々に「おい、あれって……」「竜王だ……」「旧校舎に封印されてたんじや……」などと呟いている。

ウ、ウロちゃんが転校してきた！？

驚いているのは僕だけじゃないようで エルも、リアも、クラスマイトたちも口をぽかんとさせてている。わかる、わかるよ、その気持ち

何とも言えない空氣の中、唯一この場においての例外は、先生だ

けだった。

「えー、じゃあ、ウロの席は……笛木の左隣りで」

「つむ、了解じゃ」

「ちょ、ちょっと待てよ、先生！ その席には俺がいるでしょ、俺が！？」

先生は相変わらずの抑揚のない声でウロちゃんの席を僕の左に指定した。ちなみに先生はウロちゃんを「ウロ」と呼んでいる。

しかし、何やら負け犬が納得がいかないと遠吠えを上げている。それを見て先生は頭を抱えるように片手を置いた。

「あー……」

「涼の隣は俺の席でしょ？ だから、転校生は違う席に」

「……オマエ、誰だっけ？」

「燐だよつ、紅蓮燐！ 担任の教師が生徒の名前忘れるとかどんだけだよ！？」

「あー、とりあえず邪魔だから、席かわれ」

「ひ、ひでえ！ って、お前ら、何うんづととうござってんだつ。そ、そんなに邪魔か？ そんなに俺は邪魔なのか！？」

「燐……時として現実とは、残酷なものなんだよ」

「お前の悟つたような優しい顔が一番残酷じやああああああああ！」

僕のなぐさめの効果もむなしく、燐は悲痛に叫んだ。燐の瞳から滝のように流れる涙は、おそらく心の汗だらけ。本当に暑苦しいやつだ、青春しとる。

結局、燐は席を一つ後ろに下がることになり、結果、僕の左隣りにはウロちゃんが鎮座している。座る際、僕のほうを見て「ふん」と鼻を鳴らしていた。え、何その反応？

気にするそぶりもなく、腰を下ろすウロちゃん。

うーん、はつきり言つて小学生が椅子に座つてゐるよつこじか見えない。

真剣にHRに耳を傾けるウロちゃんに、僕は小さく話しかけてみた。

(ねえねえ、ウロちゃん)

(……なんじや?)

(ウロちゃんの趣味にとやかく言つつもりはないよ? ただ昨今、いろんな新ジャンルが開発されてくるけど)

(???)

(僕としては、幼女高校生のコスプレもなかなか乙なものだと思つよ)

「コスプレ違うわああああああ！」

「おい、ウロ、ひるむわい。まだHR終わつてないぞ」

「す、すまぬ」

HR中の先生に不機嫌そうな顔で諫められて、反射的に謝るウロちゃん。

再び席に着き直すと、僕のほつをキッとしてりんでくれる。

(お主のせいで怒られたではないか!)

(ウロちゃん……それは悲しい誤解だよ)

(? 何が違うというのじや、弁明して見よ)

(そうだね、これはある意味地球温暖化より深刻な問題だよ まあ具体的に言つと、すべてはウロちゃんの発展途上すぎる幼児体型のせいだね。非加盟国レベルだよ)

「辛口なうえに責任まで押し付けられたじやとおー?」

「ウロー、静かにしろー」

「妾が悪いと言つのか? 妾が悪いのかつー?」

(ウロちゃん、つらい現実から田を背けるのはよくなこよ)
「お主が言つなあああああ！」

分け目もふらり、ウロちゃんは一心不乱に叫んだ。
そんな様子を僕は、思春期の「ほとばしる熱いパトス」だと思い、
優しい目でウロちゃんを見守る。

うん、大丈夫。僕は見捨てないよ、ウロちゃん……

『.....』

後日。僕とウロちゃんの様子をかわいそうな田で見るクラスメイトたちの談があつたという。
「笛木涼にもてあそばれる、哀れな竜王がいた」と。

実に珍妙というか、ある意味革新的というか。

円卓会議とはよく言つたもので、現在の僕の状況を表すことのできる唯一の言葉であると断じてもいいだろひ。まあ、本来囲まるるのは卓上のほうなのだが。

「うーん、今日はえらく変わった食事スタイルだね？　この並び方は欧米の様式なのかな、それとも西洋式かな？」

「たぶん誰が見ても四面楚歌のこの状況で、そんなことを考えるのは涼くんしかいですね……」

「つむり……いやつの思考回路はまるで難解迷宮のような仕組みをしておるの」

「（こくつ）」

教室の見たままを述べた僕の感想にエル、ウロちゃん、リアの三人は一様に、しかしそれぞれに小難しい態度をとっている。

現在、お昼時。

僕らはいつも通りのメンツにウロちゃんを加えた四人で机を合わせ、普段通りに食事をとっているのだが……なぜかクラスメイトたちは教室を縁取るようにそれぞれが壁に背をつけている。まるで僕たちから少しでも距離を取ろうとしているかのように、だ。

それに見た感じ、あまり昼食は進んでいないようだ。一拳一動、僕らのほうを気にしているようであつたくと言つていいほど、箸が進んでいないし、口も動いていない。

そのため、不可思議なまでに教室は閑散としているのだ。

「えー、でもこんな感じじゃなかつたっけ？　ほら、朝尾さんたちの食卓とかこうやつでわ」

「……もしかしてとは思いますが、アーサー王の凹卓の」とですか？」

「うん、ううう。朝尾さんち、朝尾さんち」

寝耳に水な僕の反応を聞いて、エルは大きなため息をついた。

「朝尾さん、ですか。伝説の『騎士王』^{パライアン}も涼くんの前では、庶民的になるところですな……」

「うむう……お主も大変そうじやのう、苦労が滲み出でるわ……」

「大変」

なぜか、がっくりとするエルを、勞わるよひけロウヒヤウセリヤは優しい目で見つめている。

今にも肩に手を置きそうなその様子は、まるで背負つ苦労を共感している仲間のようだ。

よし、これは僕も一つ、エルを励ましてあげよう。

「まあまあ、元気だしなよ。知ってる？　ため息をつくと幸せが

」

じろり、と御三方の冷たい視線が僕を貫く。

人を殺せるとさえ思える、そんな道端に落ちるじみを見るような目で見られた僕は、三人から目を反らし、慌てて言葉を誤魔化した。いや、この時僕はまだ知らなかつたのだが……後々考えてみると誤魔化して、しまつた。が正しいのだろ？。

「『エクスプロージョン』だよ？」

僕が言葉を発した瞬間　視線の先にあつた教室の壁が、爆発した。

時と場所変わって、放課後の神魔高校生徒会室。

昼休みの壁爆発事件の容疑者として、なぜか僕に呼び出しがかかったのだ。

「一組の廊下側の壁、および廊下を挟んだその先の壁も破壊。幸い怪我人はなし、つとで？」これはいつたいどういうことなんだ、

笹木涼

静かな二人きりの教室。

深く椅子に腰かけ、乱雑に田を通し終えた書類を机に置き、彼女は僕にたずねてきた。

「たぶんというか、きっと壁さんも辛かつたんですね。皆の道をふさいでいるのが。だから壁さんは自ら崩れて……」

「ほう、つまり壁は勝手に崩れたわけだと？」

「ええ、悲しいことです……きっと壁くんも安らかに成仏、つたい、痛い！ 痛いよつ、烈姉ちゃん！」

「烈、姉ちゃん？」

「も、申し訳ございませんでしたつ、笹木生徒会長さま……」

「ちつ、わかりやいいんだよ。わかつたら一度とすんじゃねえぞ

涼

「うう……痛い。何も本気でつねることないじゃないか……」

憮然とする烈姉ちゃんを恨みがましく睨みつけ、僕は真っ赤になるまでつねられた顔をさする。

まったく、僕のほっぺたは餅じゃないんだよ、このヤンキー女！
とは言えないので黙つておく。

「何だ、まだ仕置きが足りなかつたのか？」

ぎうり、とまるで飢えた猛獸のような鋭い眼光が僕に向けられた。
な、何で、ばれたの！？

「い、いえいえ、滅相もないですっ。史上最高のお姉さまをもてて、
笹木涼は本当に幸せ者だなあと思つていただけです！」

「馬鹿が、小恥ずかしいこと言つてんじやねえよ。誰かに聞かれた
らどうすんだ」

口ではそう言つものの、烈姉ちゃんの頬は朱に染まつていた。お
そらく照れているに違いない。

ダイナマイトより危険な爆弾の一度目の火種を消火し、何とか緊
急回避に成功した。スキヤンダルされた政治家並みの僕の世渡り上
手スキルに賞賛してほしい。

「つたく、お前は……本当に世話の焼ける弟だな」

僕のほうを見て愚痴る彼女の名は、**笹木烈**。
ささき れつ

先ほどから僕が呼称しているよう、「にしき」と、僕の姉。加えて、この神魔
高校の生徒会長でもある。特徴は母さん譲りのブロードのかかつたブ
ラウンの髪と艶やかな美貌。何より男より男前すぎる発言や行動で
主に同性中心で好かれまくつているという。燐から聞いた噂によれ
ば、秘密のファンクラブまであるらしい。

自慢の姉といえば、確かに「自慢の」姉なのだが。

「今回のことには大目に見てやるが、これからは気をつけろよ？」

ルちゃんも心配するだらうからな

深く釘をさすように烈姉ちゃんは注意を促す。

でも、僕は

「でもさ、烈姉ちゃん。僕は本当に何もしてないんだよ？ それなの『ごびうじ』で僕が気をつけなきゃいけないのさ」

ずっと烈姉ちゃんの言つことには矛盾を感じていた。

あの時、僕は壁に触つてもいなければ、近づいてすらいない。完璧すぎるアリバイゆえに、どうして僕が犯人扱いされているのかがわからなかつた。

「ああん？ お前が『魔法』使つたからじゃねえか。そのせいで壁がぶつ壊れ……」

「？ どしたの、烈姉ちゃん」

なぜか、急に言葉を止め、眉をひそめた烈姉ちゃんに僕は声をかけた。

「涼……お前、『詠唱』はしたのか？」

「詠唱つて、何？ 僕は別に歌つてないけど？」

「いや、そうじやなくてだな。魔法を発現するための呪文を詠唱したのか、つて聞いてるんだ」

「魔法？ やだなあ、烈姉ちゃん。ゲームや漫画と現実を『ごけ』やにしたら駄目だよ？」

「…………」

あつけらかんとした僕の答えに烈姉ちゃんは苛立ちを隠さず、舌

打ちしていた。

えーと、お姉さまは何ゆえ、お怒りになつておられたのだろうか？ それとも僕が気に障ること言つたのだろうか。とりあえず怖い、レディース女暴走族の総長も真っ青なくらい怖いので今すぐ逃げ出したい。

「　　おい、涼」

「は、はい。何で『それこますですか、お姉さま…』」

「噛み噛みになつてんだ……まあいこや。涼、お前が今田、教室で口にした言葉をこの紙にかけ。一字一句正格こだ」

そう呟くと烈姉ちゃんは一枚の白い紙を取り出し、僕に手渡した。何の変哲もない、真っ白な紙。

「え、えーと、この紙に何か意味があるんでしょうか……？」

「ねえよ、そんなもん。とりあえずサッサと書け」

有無を言わさぬ物言い、僕はしづしづとペンを取り出し、書き始めた。

幼いころも烈姉ちゃんの意見に対抗したり、反対した時は……一度とそんな気が起こらないまでに躊躇^{しつけ}されたのを思い出す。

痛い、苦しい、うめんなさいの連續。

詳しことを語るなど、恐ろしくて震えが止まらなくなるぐらいだ。

基本的に父さんや母さんは怒るところとしないので、烈姉ちゃんに代わりに躊躇^{しつけ}されたといふイメージがある。だから正直言つと、親より怖い存在なのだ。

「お、書けたじゃねえか。見せてみろ」

僕が書き終えた瞬間、ヒヨイと烈姉ちゃんの手が紙をとつていつ

た。

文句は言わないんじゃない、言えないんだ！ などと、大捜査線もびっくりなことを考えていると

「なるほどな……『エクスプロジェジョン』か。確かにこいつは、空気を爆発させる」としかできない魔法なんだがなあ」「

難しい顔で僕を見やる烈姉ちゃん。

何やら心配そうに僕を見た後、ふうとため息をついていた。

「よし、まあ原因はわかった。とりあえず、涼。お前一度と『エクスプロジェジョン』という言葉は使うな。わかったな？」

「え、でも、烈姉ちゃん。何で、エクスプロジェジ

「使うなつってんだよ、わかったな？ わかつたら、返事しろ

「う、うん……わかったよ」

「よしよし、それでいい。それとな　」

いろいろと腑に落ちなかつたけど、リード反論してもあとが怖いだけ。

逃げるんじゃないの、一歩引くだけだ！ そつそつと聞かせ、戦略的撤退な考えをまとめてこると、

「涼、お前 生徒会に入れ。姉命令だ」

さらに大きな爆弾が投下されるといつ、降伏宣言も無視した状況になつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944z/>

潜在能力は有効に使いましょう（改）

2012年1月5日21時52分発行